

近代中国研究センター

彙報

4



1964



も く じ

太平天国史研究論文目録	1
日本人の新中国旅行記	17
センター・ニュース	28
新刊紹介	30



3 9 10 1 2 JAPAN 3 4 5 6 7 8 9 20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1

太平天国史研究論文目録

(中国文新聞雑誌之部)

は し が き

1) この目録は、中国文の新聞雑誌に掲載された太平天国史に関する研究論文、史料紹介等の目録です。

2) この目録は、著者の五十音順に配列されています。

3) 著者のあとに論文が掲げられています。同一著者の論文は、刊行年次にしたがって配列されています。

4) 論文名のあとの括弧内には、掲載新聞雑誌名とその巻号とが記され、コンマの後には刊行の西暦年が掲げられています。但し、新聞および最近中国の雑誌のばあいには、巻号のところすでに刊行年次が示されていますので、コンマをつけて、あらためて刊行年次を記すことは省きました。

5) この目録に収録されている新聞雑誌、論文の中には、後に、単行本に転載収録されたものがあります。括弧の次に記されているローマ数字は、その論文が次の単行本に収録されていることを示します。

- ① 謝興堯「太平天国史事論叢」(1935)
- ② 簡又文「太平天国雜記」第一輯(1936)
- ③ 謝興堯「太平天国叢書」十三種(1938)
- ④ 羅爾綱「太平天国史叢考」(1943)
- ⑤ 簡又文「太平天国雜記」第二輯(1944)
- ⑥ 羅爾綱「太平天国史弁偽集」(1950)
- ⑦ 華北大学歴史研究室
「太平天国革命運動論文集」(1950)
- ⑧ 羅爾綱「太平天国史記載訂謬集」(1955)

- ⑨ 羅爾綱「太平天国史事考」(1955)
- ⑩ 羅爾綱「太平天国史料弁偽集」(1955)
- ⑪ 羅爾綱「太平天国史料考釈集」(1956)
- ⑫ 羅爾綱「太平天国文物図釈」(1956)
- ⑬ 包遵彭・李定一・呉相湘共編
「太平軍」(中国近代史論叢第一輯, 1956)
- ⑭ 羅爾綱「太平天国史蹟調査集」(1958)
- ⑮ 景珩・林言淑共編
「太平天国革命性質問題討論集」(1961)

6) この目録は、収録されている論文をすべて見た上で作られたものではありません。次に記す目録、索引類によったものが少くありません。

- 太平天国資料目録
- 中国近代史論文索引稿
- 中国史学論文索引
- 国学論文索引
- 民国学術論文索引
- 期刊論文索引
- 全国主要報刊資料索引
- 東洋史研究文献類目

7) この目録は、1963年度のわたくしの演習に参加したお茶の水女子大学の学生がつくったものです。この学生たちが同時につくった太平天国史研究の日本語・中国語単行本、日本雑誌所載の研究論文の目録は、「太平天国史研究文献目録」として、「お茶の水史学」第6号に掲載されています。

(市古宙三)

- 逸 焦
 洪福異聞 (北平晨報 1935-3-15.16)
- 尹星侶
 常熟發現太平天国遺物 (大公報 1952-1-16)
- 隱
 紅巾興潰實錄 (北平晨報 1936-11-9.10.11.25)
- 禹一寧
 太平天国的婚姻制度 (光明日報 1950-10-22)
- 榮孟源
 太平天国曆書中的問題 (光明日報 1951-1-16)
 史料拾零——張樂行告示 (進歩日報 1951-2-3)
 太平天国的「天」 (歴史研究 1954-3)
 太平天国的「太平」 (歴史研究 1955-4)
 太平天国有關土地制度的公牒 (新建設 1956-2)
 天地会 (歴史教学 1956-5)
- 苑書義
 試談太平天国領導集团的分裂 (歴史教学 1957-2)
 陳玉成李秀成与太平天国後期的軍事 (歴史教学 1958-10)
- 袁 震
 美国人華爾帮助滿清屠殺中国人的血債 (天津進歩日報 1950-12-5)
- 袁定中
 關於太平天国革命的性質問題——兼評郭毅生「略論太平天国革命的性質」一文 (歴史研究 1957-8) ⑮
- 袁 飛
 太平天国的歌謠 (民間文学 1959-3)
 太平天国的伝説 (民間文学 1959-3)
 太平天国歌謠兩首 (民間文学集刊 9, 1959)
- 王永康
 略論洪秀全的民主主義革命思想 (中学歴史教学 1957-10)
- 王 瑛
 太平天国革命前夕土地問題的一瞥 (食貨 2-3, 1935)
 太平天国革命前夕的土地問題 (中山文化教育館季刊 3-1, 1936)
 再論太平天国革命前夕的土地集中問題——兼答沈煉之先生 (華北日報 1937-5-6.13.27)
- 王学莊
 試論石達開從定都天京到内訌前夕的活動 (光明日報 1962-8-15)
- 王斤役
 遙応洪秀全起義之林俊 (逸経 35, 1937)
- 王慶成
 關於石達開大渡河覆敗的真相 (光明日報 1960-3-17)
- 王興福
 介紹太平天国史料「寇難紀略」 (光明日報 1963-5-22)
- 王 二
 關於「咸豐十年庚申大乱記」 (歴史研究 1957-3)
- 王樹林
 有關太平天国的年画故事 (民間文学 1959-1)
 太平天国時期的民間年画 (文物 1959-5)
- 王重民
 記巴黎国家図書館所藏太平天国文献 (大公報 1935-6-13)
 劍橋太平文献新録 (国聞週報 13-12, 1936) ⑯
 記巴黎国家図書館所藏太平天国文献 (図書季刊 2-2, 1936)
 太平天日 校録 (逸経 13.14.16, 1936)
 資政新篇 校録 (逸経 17~19, 1936)
 太平天国官書補編叙録 (北平図書館館刊 10-6, 1936)
 劍橋大学所藏之太平天国文件 (逸経 23, 1937)
 太平天国官書新編叙録 (逸経 27, 1937)
- 王淑慎
 太平天国結婚證書合揮所用「揮」字的意義 (歴史研究 1956-3)
 太平天国歴史博物館史料編輯概況 (新建設 1961-6 光明日報 1961-6-21)
 太平天国北伐人数問題 (光明日報 1963-1-30)
- 王承仁
 我對於太平天国革命性質的幾点意見 (武漢大学人文科学学報 1959-8) ⑰
- 王振国
 長毛状元王韜 (逸経 33, 1937)
- 王新邦
 應該嚴肅認真对待革命導師的經典著作——对朱培民同志「天朝田畝制度在当時歴史条件下不帶有反動性」一文的商榷 (光明日報 1960-9-1)
- 王崇武
 英国的鴉片貿易和它对太平天国的態度 (天津進歩日報 1952-11-9)
 訪問蘇州的太平軍 (歴史教学 1953-1~2) (翻訳)
 英国侵略者破壞太平天国革命的一段史料 (歴史教学 1957-4)
- 王宗維

Apr.
 本書は
 黎元洪
 黎元
 い。卷
 しいも
 志摩日
 現代
 を、夫
 湖記 (愛眉小
 日~17
 杭州—
 小曼日
 のほか
 られた
 さめら
 瞿秋白
 陳独
 た瞿秋
 る。卷
 る。こ
 5月、
 の。「
 人物」
 人」
 蔣百里
 民国
 評伝で
 が何時
 れてい
 に蔣の
 てい
 郁達夫
 郁達
 月31日
 村居日
 客杭日



- 有關太平軍和李藍起義軍的幾個具体問題 (光明日報 1961-4-26)
- 王 忠
太平天国革命人民如何对付外国侵略者 (新建設 3-1, 1950) ⑦
- 王天獎
太平天国鄉官制度中地方公举問題 (學術月刊 1958-2)
太平天国鄉官的階級成分 (歷史研究 1958-3)
太平天国的郡県地方政權 (文史哲 1958-5)
關於太平天国的土地制度 (史学月刊 1958-11)
太平天国革命後蘇浙皖三省的土地關係 (新建設 1963-8)
- 王伯祥
太平天国残留文献中所表見的革命精神 (学生雜誌 17-1, 1920)
- 王文才
對於李藍起義某些問題的商榷 (歷史研究 1957-10)
- 汪光沢
有關太平軍在徽州活動的一些史料摘録自胡晋柱著「介夫年譜」 (安徽史学通訊 1957-10)
- 何維凝
太平天国時代中国塩政概観 (社会科学 1-2)
- 何慧清
雲南杜文秀建国十八年之始末 (逸経 12~16, 1936)
- 何祥仁
1853年の閩南小刀会起義 (史敏共著) (史学月刊 1959-9)
- 夏 鼎
太平天国前後長江各省之田賦問題 (清華學報 10-2 1935)
- 賈 岩
太平天国的土地政策 (光明日報 1951-2-3)
- 賈熟村
太平天国的六等爵考 (人文雜誌 1957-5)
幼南王考 (學術月刊 1957-7)
太平天国革命的性質問題——对郭毅生「論新興市民等級在太平天国革命中的作用」一文の看法 (歷史研究 1957-8) ⑮
打進太平天国内部の地主「永昌徐氏」 (光明日報 1958-3-31)
有關太平天国洪楊韋石事件的幾個問題 (戎笙共著) (光明日報 1962-4-26)
一箇捏造的「史実」 (光明日報 1962-5-23)
- 華 君
太平天国名將石達開詩文之一 (政治月刊 3-6, 1935)
- 華 崗
太平天国反清戰爭の戰略研究 (群衆 8-15, 1944)
- 華 西
太平天国革命時期張秀眉領導的苗族農民起義 (民族研究 1959-8)
- 華東師大歴史系中国近現代史進修班
試論太平天国革命的性質 (歷史教学問題 1959-2) ⑮
- 艾小惠
太平天国革命時期藍朝鼎李永和農民起義 (新史学通訊 1956-4)
- 蒯世勛
上海英美租界在太平天国時代 (上海通志館期刊 1-2, 1933)
- 郭毅生
太平天国前夕商品貨幣經濟的發展 (歷史教学 1955-7)
論新興市民等級在太平天国革命中的作用 (歷史研究 3-3, 1956) ⑮
略論太平天国革命的性質 (教学研究 1957-2) ⑮
太平天国「内訌」事件雜考 (光明日報 1962-12-19)
- 郭存孝
太平天国「蘇福省」 (新華日報 1957-2-3)
太平天国民歌七首 (光明日報 1957-12-19)
太平天国「蘇福省」の疆界問題 (江海学刊 1958-6)
南京の太平天国壁画 (歷史教学 1958-7)
太平天国の禁烟政策及其實施情況 (歷史教学 1958-11)
太平天国の伝説 (民間文学 1959-6)
南京太平天国記念館 (文物 1959-4)
太平天国「天海關」考 (歷史教学 1959-12)
- 郭廷以
太平天国の極權統治——联合国中国同志会第110次座談会紀要 (大陸雜誌 10-2, 1955)
- 郭斌佳
謝興堯氏太平天国史事論叢 (武漢大学文史哲季刊 5-4, 1936)
- 覚 民
山西臨汾發現太平天国文物 (光明日報 1955-6-7)
- 葛召棠
安徽省新發現的太平天国幾件文物的考釈 (歷史教学 1957-8)
- 簡又文
太平天国文学之鱗爪 (人間世 2, 1934) ②

o. 4

たもの
査によ
「太平
が附録
西にお

24 p.

即ち月
著であ
る。但
いる。
系年表
了、軍
各国

に論文
朝鮮)
(イン
環(フ
張十

編

925年
講演、
迎るの
合も、
難解
ある。
各を附
と出て
すべて



- 太平天国天京觀察記 (G. I. Wolseley 著) (人間世 5~14, 1934) ②
- 太平天国戰役之史詩 (人間世 15~16, 1934) ②
- 太平天国史事論叢序 (人間世 40, 1935)
- 遊洪秀全故鄉所得到的太平天国新史料 (逸經 2, 1936)
- 英国政府藍皮書中之太平天国史料(校訂)(曹墅居訳) (逸經 4.5.7.10.11, 1936)
- 太平天国干王洪仁玕供辭之回訳 (逸經 9, 1936)
- 嘉興訪碑記 (逸經 14, 1936)
- 嘉興訪碑記補録 (逸經 15, 1936)
- 太平天国東北兩王内訌紀実 (逸經 17, 1936)
- 浙江文献展覧会中之太平天国文献 (逸經 20・24, 1936-37)
- 洪秀全革命之真相 (I. J. Roberts 著) 附跋 (逸經 25, 1937)
- 「欽定軍次実録」序 (逸經 27.28.30.31, 1937)
- 吳中文献展覧会中之太平天国文物 (逸經 29, 1937)
- 太平天国東王北王内訌詳記 (J. MacGowan 著) (逸經 32, 1937)
- 常熟訪碑記 (逸經 32, 1937)
- 長毛狀元王韜 (逸經 32, 1937)
- 太平天国竜鳳大花錢小志 (大風 30, 1939)
- 太平天国文物 (広東文物 10-3, 1940)
- 太平天国北伐軍戰史 (大風 96, 1941)
- 論太平天国之興亡 (民主評論 4-21, 1953)
- 太平天国田政考 (東方文化 1-1, 1954)
- 太平天国郷治考 (東方文化 1-2, 1954)
- 太平天国の基督教 (上篇) (展望 5-9, 1962)
- 馬克思学派の太平天国史観 (問題与研究 2-3, 1962)
- 忠王親筆供辭之初步研究 (思想与時代 103, 1962)
- 關於忠王親筆供辭 (思想与時代 105, 1963)
- 祁龍威
- 美英法帝国主義者組織「洋槍隊」在浙江省進攻太平天国革命軍の真相 (大公報 1953-1-30)
- 關於太平天国革命時期浙江地区武装干涉者の幾点問題 (歴史教学 51, 1955)
- 關於宋景詩起義の補述 (泰自信共著) (光明日報 1955-4-14)
- 外国資本主義在閩粵沿海對太平軍の武装干涉 (新史学通訊 1956-1)
- 試論太平天国革命の性質 (光明日報 1956-5-24)
- 介紹「鏡輝軒自怡日記」 (光明日報 1957-2-14)
- 從「東昌軍事案牘」中看太平天国革命對北方農民起義の影響 (光明日報 1957-10-24)
- 關於1860年7月華爾攻陷松江の經過 (歴史研究 1958-2)
- 太平天国札記 (山西師範学院学报 3, 1958)
- 關於「天朝田畝制度」の性質和实施問題 (光明日報 1959-11-12) ⑬
- 太平天国の反帝愛国精神——紀念太平天国革命百周年 (光明日報 1961-1-5)
- 紀果庵
- 太平軍役後清廷处理民食之方策 (真知学报 1-2, 1942)
- 咸豐大錢新考——太平軍役時期之通貨問題 (真知学报 1-4, 1942)
- 魏建猷
- 太平軍三次進攻上海 (歴史教学問題 1958-10)
- 吉林大学歴史系三年級科学研究小組
- 對羅爾綱著「太平天国史綱」一書 (吉林大学人文科学学报 1959-1)
- 牛劍秋
- 太平天国翼殿官属印摸跋 (近代史資料 1957-2)
- 鏡波
- 介紹嘘風社翻印の「李秀成親供」 (燕京大学図書館報 68, 1934)
- 金毓黻
- 太平天国恒順店印照跋 (進歩日報 1951-6-22. 大公報 1951-6-29)
- 關於忠王李秀成自伝原稿真偽問題の再商榷 (歴史研究 1957-1)
- 金華
- 洪秀全宗教弁疑 (磐石雜誌 2-11, 1934)
- 金冲及
- 關於天朝田畝制度の實質問題——兼評郭毅生「略論太平天国革命の性質」一文の若干論点 (胡繩武共著) (學術月刊 1957-9) ⑭
- 靳一舟
- 太平天国革命性質討論述評 (歴史研究 1961-2) ⑮
- 瞿静涵
- 從民謡看太平天国の政策制度 (歴史研究 1956-10)
- 景珩
- 關於李秀成自伝真偽問題の商討 (新華半月刊 1957-3)
- 湘軍——太平天国革命時期の反動地主武装 (歴史教学 1957-9)
- 關於太平天国史事の研究問題——對羅爾綱先生一些研究方法的商榷 (學術月刊 1957-9)
- 慶萱
- 石達開軼事 (北京世界日報 1935-6)
- 石達開未降之伝説 (北平晨報 1935-8-20)



- 劍 秋
庚申避乱実録 (北平晨報 1935-10-28~30, 11-1, 4~6, 8, 9, 11, 12, 16, 18, 19)
- 劍 白
太平天国遺聞 (北平世界日報 1935-7-17, 18)
- 健 中
太平天国革命の土地綱領和經濟政策——紀念太平天国革命110周年 (光明日報 1961-1-9)
- 嚴 修
太平軍諸暨之戰与包立生 (光明日報 1962-12-19)
- 嚴中平
太平天国侍王李世賢部寧波攻守紀実 (進歩日報 1951-8-3)
戈登論李鴻章蘇州殺降動機書並跋 (進歩日報 1951-9-14)
太平天国初期英国の対華政策 (新建設 1951-9)
1861年北京政変前後中英反革命的勾結 (歴史教学 1952-4, 5)
- 古 蘆
太平軍永安突圍 (史学月刊 1959-5)
- 胡繼高
保護蘇州雙塔中宋人墨迹和太平天国忠王府彩繪の経験介紹 (文物参考資料 1955-5)
- 胡思庸
太平天国革命時期貴州の苗教大起義 (新史学通訊 1954-8, 9)
關於楊章事變的一個問題 (新史学通訊 1956-8)
- 胡叔磊
太平軍目睹之一角 (国聞週報 11-49, 1934)
- 胡浄生
試論李永和蘭朝鼎起義与太平天国的關係 (史学月刊 1959-11)
- 胡 繩
洪秀全与馮雲山 (上海大公報)
太平天国和資本主義外國の關係——洪秀全怎樣向西
方国家尋找真理 (学習月刊 1, 1949)
- 胡繩武
關於天朝田畝制度實質問題 (金冲及共著) (學術月刊 1957-9) ⑤
- 胡白濤
太平軍出入漢中的一段史実 (文史雜誌 4-3, 4, 1944)
- 胡 浜
李鴻章与太平天国革命 (光明日報 1954-5-27)
- 胡友棠
干王洪仁玕親筆供辭 (逸経 20, 1936)
幼王天恤王昭王原供 (逸経 22, 1937)
- 湖南省文物工作委員会
太平天国「偽」官執照及「偽」印清冊 (湖南歴史資料 1958-1)
- 顧 深
虎口生還記 (人文 6-8, 9, 1935)
- 吳繼政
試論曾添養在太平天国西征中的作用及其地位——兼
与范文瀾, 張健甫, 陳懷, 衡孟諸先生商榷 (史
学月刊 1957-12)
- 吳雁南
試論韋昌輝 (史学月刊 1957-10)
試論太平天国的土地制度 (歴史研究 1958-2)
試論洪秀全政治思想的主要特徵 (人文雜誌 4, 1958)
從「天王詔書」看太平天国的土地制度 (史学月刊 1958-10)
- 吳示模
試論太平天国革命性質の轉變 (合肥師範学院学報 1960-5, 6)
- 吳松齡
論太平天国革命思想的特点及其性質 (山東大学学報 1, 1959) ⑤
- 吳静山
王韜事蹟考略 (上海研究資料 1936)
- 吳先乙
幾種鈔本の太平天国史料 (天津大公報 1935-4-11)
- 吳宗慈
太平天国紀元年号之述疑 (現代史学 3-2, 1937) ⑬
太平天国封爵總表 (中山大学研究院史学專刊 2-1, 1937)
- 吳 沢
一個半殖民地農民革命史実の新覽本 (労働季報 9, 1936)
- 吳曼公
庚申常州城守日記 (逸経 21, 1937)
- 吳良祚
關於「天朝田畝制度」中農業社会主義思想の理解問題 (歴史教学 1955-12)
關於「天父詩」(讀史札記) (歴史研究 1957-9)
關於「夢兆詔」和「上天親征詔」 (史学月刊 1957-9)
- 孔憲易
太平天国進軍開封一百零一年 (新史学通訊 1954-6)

- 太平軍渡江北伐前夕の豫皖辺区農民運動初探（新史学通訊 1954-11）
- 太平天国壁画能画人物的一个佐証（歴史研究 1956-11）
- 広西省太平天国文史調査団
拜上帝会成立前金田地区の階級闘争（歴史研究 2-5, 1955）
- 広西師範学院中文系
太平天国の伝説（民間文学 1960-11）
- 向達（仏馱耶舎）
述近出太平天国史料三種（史学雑誌 1-2, 1929）
- 江世榮
対祁竜威「從“東昌軍事案牘”看太平天国革命対北方農民起義の影響」一文之商訂（光明日報 1957-12-5）
- 江 地
皖北根拠地失守与張洛行殉難（光明日報 1953-8-8）
太平軍北伐戦争始末——兼論初期捻軍の抗清闘争（1853.5~55.5）（山西師範学院学報 1, 1957）
論太平天国和捻軍起義の關係（歴史研究 1963-3）
- 洪 業
太平天国文件之未經發表者（燕京大学図書館報 1.2, 1931）
- 洪 深
申報編纂「長毛状元」王韜考証（文学 2-6）
- 洪卜仁
太平天国革命時期閩南小刀会の反清起義（光明日報 1955-3-15）
- 侯外廬
論洪秀全与洪仁玕（新建設 1952-4）
- 高景憲
太平天国志序（国学叢刊 1-4, 1923）
- 高植蘭
英王陳玉成の籍貫（近代史資料 6, 1957）
- 黄照熹
太平軍攻桂記実（逸史 2）
- 黄長椿
江西史学界討論——太平天国郷官問題（姚肇浜共著）（光明日報 1961-7-8）
- 黄廷柱
怎樣講授「太平天国革命運動」（中学歴史教学 1957-10）
論「天朝田畝制度」（中学歴史教学 1958-1）
- 黄苗子
華爾和他的「洋槍隊」（新觀察 2-2, 1951）
- 黄良瑜
太平天国文物制度（協大文芸史地社会論文摘要 5, 1937）
太平天国文物制度摘録（協大史地社会論文摘要 3-8, 1937）
- 項 陽
太平天国的反帝闘争（南京新華日報 1951-1-11）
- 剛 主
太平天国時代之文人生活（中国文芸 1-3, 1939）
- 谷霽光
羅爾綱著「太平天国史綱」（書評）（政治経済学報 5-3, 1937）
- 左歩青
從展覽会看美帝侵略中国（上海大公報 1951-1-27）
- 蔡起賢
太平天国北征將領林鳳祥（歴史研究 1957-4）
- 珊 珊
天南遁叟上忠王書（珊瑚 1-8, 1932）
- 懺 盧
新發現之太平天国告示（復興月刊 5-10, 1937）
- 司綬延
太平天国革命（歴史教学 2-3, 1951）
- 史一兵
太平天国「天朝田畝制度」の性質及其作用（江海学刊 1961-1）
- 史 式
太平天国の文字改革（光明日報 1963-8-21）
- 史專一
略論太平天国理想的農民公社（趙矢元共著）（學術月刊 1959-12）
- 史 敏
1853年の閩南小刀会起義（何祥仁共著）（史学月刊 1959-9）
- 謝興堯
洪楊卮談（北平晨報 1932-1）
洪楊建国統談（北平華北日報 1932-1）
李昭寿事略（洪楊卮談之一）（北平晨報 1932-8-13~9-14）①
洪楊建国雜記（北平華北日報 1932-10）
王韜上書太平天国事蹟考（国学季刊 4-1, 1934）①
太平天国忠王李秀成之死及其供詞弁疑（北平晨報 1934-4-16.17）①
讀江南春夢庵筆記跋尾（国聞週報 11-23, 1934）①
英国博物館所藏太平天国史料考（天津大公報 1934-6-16）①

- 錢江(太平天国人物志之一)(北平晨報 1934-6-18) ①
- 太平天国曆法考——附太平新曆与陰曆陽曆对照表(史学年報 2-1, 1934) ①
- 太平天国的文学(1)(2)(芸文雜誌 2-1.2, 1934.35)
- 關於太平天国本身文件的討論与洪秀全詩(人間世 20, 1935)
- 蕭一山先生所藏太平天国史料閱後記(国聞週報 12-14, 1935) ③⑬
- 關於太平天国的曆法(并答薛澄清君)(大公報 1935-4-12)
- 李開芳被殺之情形(国聞週報 12-20, 1935) ③⑬
- 由朱案談到洪門及其五子(国聞週報 12-21, 1935)
- 太平天国前紀(国聞週報 12-24, 1935)
- 太平天国史事論叢序(天津大公報 1935-7-4) ①
- 讀「小滄桑記」(国聞週報 12-32, 1935) ③
- 跋汪梅翁乙丙日記(天津大公報 1936-1-16)
- 太平話(逸經 1-1.3, 1936)
- 「盾鼻隨聞錄」跋(逸經 2, 1936) ③
- 老万山与朱九濤(国聞週報 13-17, 1936) ③
- 烏蘭泰与洪楊(国聞週報 13-19, 1936) ③⑬
- 關於「上海在太平天国時代」的史料(国聞週報 13-23.25, 1936) ⑬
- 讀「太平天国叢書第一集」書後(国聞週報 13-34, 1936) ⑬
- 讀「蛮氛匯編」(逸經 12, 1936) ③
- 跋「髮逆初記」(逸經 17, 1936) ③
- 太平天国史事雜錄(国聞週報 14-3.6.9.11.13.15.18.23.25.27.29, 1937)
- 太平天国的革命 上下(人民中国 4.5, 1955)
- 謝璉造
介紹「太平天国史料叢」(光明日報 1954-5-27)
- 朱 活
關於「太平天国改國書國」問題的商榷(新史学通訊 1956-3)
- 朱 傑
太平天国翼王石達開死事考(東方雜誌 38-21, 1941)
- 太平天国在南京的遺蹟(旅行雜誌 25-2, 1951)
- 朱謙之
太平天国史料及其研究方法(現代史学 5-1)
- 太平天国的文化革命運動(新建設 2-3)
- 朱子爽
「雙林鎮志」中的「兵燹記」(歷史研究 1957-6)
- 朱培民
「天朝田畝制度」在當時歷史条件下不帶有反動性(光明日報 1960-3-3)
- 朱保雄
跋李秀成供(清華週刊 30-1, 1928)
- 周衍發
「林鳳祥的籍貫及其他」一文質疑(光明日報 1962-5-23)
- 周 鑑
月鋤与胞弟子仁小崔書(近代史資料 1955-3)
- 周 邨
進一步研究并發揮太平天国文献的作用——「太平天国文献」總序(光明日報 1962-5-6)
- 周 南
談談对「天朝田畝制度」中農業社会主義思想的理解(歷史教学 1955-9)
- 太平軍北伐对清朝的震動(光明日報 1961-6-21)
- 周穗成
太平天国黃祠墓田憑跋(天津進步日報 1951-3-23, 報大公報 1951-4-6)
- 太平天国黃興和商憑跋(進步日報 1951-3-31, 大公報 1951-4-20)
- 太平天国過穀記吳凝林吳公祠錢糧執照並跋(歷史教学 3-3, 1952)
- 太平天国常熟守將錢柱仁發田憑並跋(歷史教学 3-1, 1952)
- 太平天国潘叙奎蕩憑並跋(歷史教学 3-2, 1952)
- 「吳江庚辛紀事」一種有關太平天国的史料(進步日報 1952-5-4, 大公報 1952-5-15)
- 林鳳祥, 李開芳被俘原因及就義經過事蹟的新發現(進步日報 1952-8-29, 大公報 1952-8-28)
- 戎 笙
有關太平天国洪楊韋石事件的幾個問題(買熟村共著)(光明日報 1962-4-26)
- 俊
新發現的太平天国渡船規約石碑和壁画(文物參考資料 1956-7)
- 徐一士
王闔運与湘軍志(逸經 14.15.16, 1936)
- 徐蔚南
上海在前期太平天国時代(上海通志館期刊 2-2, 1934)
- 上海在後期太平天国時代(上海通志館期刊 2-4, 1935)
- 上海小刀会乱事的始末(逸經 26, 1937)
- 徐慶堅
太平天国時代貴州苗民起義(史学月刊 1959-5)
- 徐光摩
王韜的卒年(申報 1948-3-20)
- 徐夕明

- 我不認為「天朝田畝制度」的性質是反動的（歷史研究 1959-9）⑮
- 徐宗沢
太平天国之宗教（聖教雜誌 25-5, 1936）
- 徐葆環
介紹太平天国起義百年紀念展覽會（上海解放日報 1951-2-17）
- 徐力
百年前人民的水上部隊——太平軍水營（与羅爾綱先生商榷）（史學月刊 1957-1）
試論楊秀清（史學月刊 1957-10）
- 徐倫
太平天国反对外国侵略者的斗争（學術月刊 1961-1, 光明日報 1961-1-26）
- 肖青
太平天国時期的民歌（光明日報 1958-3-17）
- 邵循正
太平天国革命後江南的土地關係和階級關係（光明日報 1961-2-2）
- 章開沅
關於太平天国土地政策的若干問題（華中師範學院學報 1957）
有關太平天国革命性質的幾個問題（理論戰線 1958-2）⑮
- 紹溪
從外国直接史料中看侵略者怎樣扼殺太平天国（上海大公報 1951-1-25）
展覽會中實物和文獻（上海大公報 1951-1-27）
- 焦木
紅巾始末秘史（北平晨報 1935-5-25）
紅禍紀實（北平晨報 1935-7-6.8）
- 蔣勁柏
太平軍在壽昌歌謠兩首（民間文學 9, 1959）
- 蔣瑞藻
錢江伝（小説月報 8-7, 1917）
- 蔣度平
太平天国的婦女春秋（現實 1-15.16.17, 1934）
- 蕭一山
太平天国叢書第一集序（大公報 1934-12）
太平天国新史料并跋（國聞週報 12-15.16.21.22.25, 1935）
天地會起源考（中山文化教育館季刊 2-3, 1935）
李秀成覆英国教士艾約瑟 楊篤信書並跋（國聞週報 13-41, 1936）⑮
李秀成致其子侄諄諭并跋（國聞週報 13-50, 1936）
- 李秀成致賴文光諄諭並跋（逸經 21, 1937）
洪秀全來歷（經世 1, 1937）
李秀成譚紹光覆大英會帶常勝軍戈登書並跋（經世 1-2, 1937）
太平天国慕王譚紹光復戈登書考釈（中華月報 1-3, 1937）
太平天国新史料（經世 1-4~9, 1937）
戈登文書（國聞週報 14-17.19.22.24.26.28, 1937）
太平天国兵冊（經世 1-11.12, 2-1, 1937）
天德王洪大全考（文史雜誌 3-7.8, 1944）
太平天国革命運動及其影響——聯合國中国同志會第51次座談會紀要（大陸雜誌 5-3, 1952）
太平天国干王洪仁玕自述並考（經世 47.48）
資政新篇考略（青年中国 1-2）
- 鍾珍維
試論太平天国革命的性質——与華東師範大學歷史系中国近現代史進修班商榷（歷史教學問題 1959-5）⑮
- 鍾夢齡
太平天国之農民革命及其思想（農村經濟 1-10, 1934）
- 常青
太平天国革命性質問題討論簡介（光明日報 1959-11-26）
- 岑子潜
太平天国的貨幣（岑立虎共著）（文物參考資料 1957-12）
- 岑立虎
太平天国的貨幣（岑子潜共著）（文物參考資料 1957-12）
- 人民日報
太平天国革命是不是單純的農民戰爭（人民日報 1951-2-2）
- 隋覺
太平天国女館考（文史雜誌 4-3.4, 1944）
- 隋樹森
關於宋景詩的革命事跡（光明日報 1951-9-1）
- 鄒知白
李永和藍朝鼎起義始末（光明日報 1955-4-14）
- 静吾
太平天国時期帝國主義勾結封建勢力侵略中国的一張合同（光明日報 1955-5-12）
- 石榮暉
關於太平天国興國軍包打洪山及其他（湖北日報 1957-3-9）
- 石力城



- 從對外關係看太平天國的悲劇——紀念太平天国革命
運動一百一十周年 (歷史研究 1961-1)
- 石 林
讀「太平天国歌謠」散記 (民間文学 1959-8)
- 席濂塵
小刀会与太平天国時代的上海外交 (上海通志館期刊
1-1, 1933)
- 借 陰
書程學啓誘降蘇寇及攻嘉興事 (人文 2-1, 1931)
- 戚本禹
評李秀成自述——并同羅爾綱·梁帖盧·呂集議等先
生商榷 (歷史研究 1963-4)
李秀成親供版本之比較 (天津大公報)
- 薛澄清
太平天国曆法質疑 (大公報 1935-3-15)
李秀成親供板本考 (厦門大學學報 3-1, 1935)
國內研究太平天国歷史之已有成績 (天津大公報 19
37-5-21)
- 詹若文
一首偉大史詩的披露 (大公報 1951-1-27)
- 錢祖夫
關於太平天國的民歌 (光明日報 1953-7-11)
- 素 癡
不列顛博物院所藏中國寫本管記 (國聞週報 11-21,
1934)
- 蘇紹文
介紹幾編石達開的詩文 (北平晨報 1935-1-5~7)
- 蘇誠鑑
試論洪仁玕 (光明日報 1955-9-1)
- 宋 炎
太平天国革命時期浙南金錢會的起義 (浙江師院學報
1, 1955)
記太平軍解放溫嶺的布告 (浙江日報 1957-4-7)
- 曾覺叟
洪楊不可稱革命豪傑宜正名教匪論 (國學論衡 6,
1935)
- 曹國祉
太平天国的地方政治制度 (新史學通訊 1956-7)
關於「太平天国革命時期的槍船」問題 (中學歷史教
學 1957-6)
太平天国雜稅考 (歷史研究 1958-3)
論太平天国的土地政策及其賦稅制度 (上編) (中山
大學學報 3, 1959)
太平天国革命時期江浙太湖地区「槍船」的性質問題
(史學月刊 1960-2)
「備志紀年」中的太平天国史料 (光明日報 1963-2
-13)
- 曹錫珍
美帝怎樣摧殘上海太平天国革命運動 (上海文匯報
1950-11-14)
- 曹聖居
英國政府藍皮書中之太平天国史料 (訳) (逸經 4.
5.7.10.11, 1936)
- 束世激
關於「忠王自伝原稿」真偽問題的商榷 (年子敏共著)
(新華半月刊 1957-3)
- 息 与
太平天国革命的性質 (進步青年 231, 1951)
- 村立(等)
太平天国的伝説 (民間文学 1959-8)
- 孫觀圻
關於李秀成自伝原稿的真偽問題 (歷史研究 1957-4)
- 孫百朋
關於績溪曹氏支祠的壁画是太平天国嫡系部隊所繪的
考証——對羅爾綱先生提出幾點商榷 (安徽史學
通訊 1957-10)
- 孫 文
太平天国戰史序 (民權素 3, 1914)
- 秦自信
關於宋景詩起義的補述 (祁龍威共著) (光明日報
1955-4-14)
- 戴 逸
論太平天国革命發生的原因——紀念太平天国革命一
百十周年 (光明日報 1961-1-11)
- 沢
關於太平天国之幾種書籍 (聖教雜誌 25-7, 1936)
- 卓申甫
太平天国戰爭中的幾點史料問題 (人民日報 1950-
10-18)
- 丹 林
從洪大全画像說起——天王与天德王的分別 (上海大
公報 1951-1-15)
- 单少康
安徽省績溪县太平天国壁画 (文物 1959-11)
- 覃高積
太平天国時期广西僮族人民的反清鬪爭 (史學月刊
1958-5)

4
06)
国に
天
著者
00)
愛
であ
教,
27
上
こみ
日
の模
され
を全
教育
者は
底に
5)
展覧
名の
手2
同展
書,
観察
こと
1)
日よ
国を
云,
書
の真
育の
本



- 譚彼岸
太平天国史料——「雪鴻山館紀年」稿本介紹（中山大學學報 1956-4）
- 中大歷史系東莞縣志編寫小組
東莞縣響應太平天国革命的何六起義——東莞縣志近代史部分（中山大學學報 1959-1, 2）
- 仲子璋
太平軍大成合肥城（安徽日報 1958-2-8）
- 仲輯
新發現的太平天国史料選輯（近代史資料 1955-3）
- 張一純
太平天国革命時期的婦女（歷史教學 1955-4）
- 張惠泉
「欽定土階條例」逸文（歷史研究 1957-8）
- 張克寬
我是怎樣教「太平天国天朝田畝制度」這一課的（歷史教學 1956-10）
- 張作耀
也談太平天国革命性質（山東大學學報 1959-1）^⑮
- 張爾田
汪梅翁乙丙日記評（學術世界 2-2, 3, 4, 1936~37）
- 張守常
一本記述太平天国北伐軍內部情報的回憶錄「復生錄」（光明日報 1962-12-5）
- 張從淦
太平天国紀念館展出侍王府的石門當（文物參考資料 1958-11）
- 張祝齡
太平天国干王題壁大字之新發現（逸經 8, 1936）
- 張書熙
對「太平天国革命的一支洪流——雲南哀牢山彝民起義軍的土地綱領和鹽鉄等經濟措施」的幾點意見（光明日報 1961-7-10）
- 張振鷗
太平天國的鄉官（歷史教學 1953-3）
- 張生旺
對李藍起義一些問題的探討——兼與李祖桓王文才二位先生商榷（人文雜誌 1955-4）
- 張乃修
如夢錄（節錄）（近代史資料 1955-3）
- 張忠
我講「太平天国後期的關爭」一節課的一些做法（歷史教學 1959-4）
- 趙意誠
王韜考証（學風 6-1, 1936）
- 趙矢元
略論太平天国理想的農民公社（史專一共著）（學術月刊 1959-12）
- 趙捷民
太平軍在天津（天津日報 1957-2-10）
- 趙大煊
記粵匪兩陷黔江始末（華西學報 1934-2）
- 沈元
洪秀全和太平天国革命（歷史研究 1963-1）
- 沈守之
借巢筆記（人文 7-8, 9, 10, 1936）
- 沈俊
太平天国革命運動與基督教（歷史科學 1933-6, 7）
- 沈燮元
介紹一部有關太平天國的史料「如夢錄」（天津進步日報 1951-8-10）
- 沈心康
太平軍大捷（安徽史學通訊 1959-6）
- 沈忱農
論太平天國的革命（反攻 224, 1960）
- 陳偉芳
總論太平天国革命性質爭論的中心問題（廣西日報 1961-4-13, 14）^⑯
- 陳貴宗
關於太平天国革命的性質問題（文史哲 1958-4）^⑰
- 陳恭祿
景印張德堅總纂的賊情彙編（圖書評論 2-4, 1933）
評「太平天国雜記第一輯」（武漢大學文史哲季刊 5-1, 1935）^⑱
- 陳訓慈
太平天国之宗教政治（史學雜誌 1-6, 2-1, 1929, 1930）
- 陳慶華
崇厚檔案中所見之英法侵略者對太平軍捻軍的武裝干涉（光明日報 1955-9-1）
- 陳錫洛
太平軍的故事——旧伝説・民間故事鈔（民間文芸集刊 2, 1951）
- 陳大經
幾篇英訳太平天国文件（輔仁廣東同學會 2, 1934）
太平天国與西洋之關係（磐石雜誌 4-1, 1936）
- 陳達農
太平天国起義錢的發現經過和考証（文物參考資料 1957-12）

- 陳湛若
太平天国「恒興店憑」与当時物価問題（新史学通訊 1955-7）
- 陳白塵
農民革命英雄宋景詩及其黑旗軍——「宋景詩歷史調查報告」提要（人民日報 1952-11-1）
- 丁雲青
太平天国太陽河碼頭渡船規條碑跋（歷史研究 1956-7）
忠王李秀成自伝原稿是曾國藩等所偽造的麼？（文史哲 1957-3.4）
- 丁易
美帝幫助滿清扼殺太平天国革命運動（光明日報 1950-11-18）
太平天国打败美国「常勝軍」的故事（中国青年 1951-4-7）
- 丁煥章
宋景詩領導的農民起義（西北師範學院鳴争 1957-6）
- 丁紹会
太平天国制度之研究(1)（大夏大學史地叢刊 1, 1933）
- 丁諦
「太平天国詩文鈔」（書評）（出版周刊 191, 1936）
- 程碧冰
太平天国一代文學述評（文化批判，中國民族史研究特輯）
- 鄭家相
太平天国時期地方代用幣（文物 1959-5）
- 鄭鶴声
太平天国婦女解放運動及其評價（文史哲 1955-8）
忠王李秀成自伝真偽問題商榷（文史哲 1957-4）
- 鄭天挺
宋景詩起義史實初探（進步日報 1951-10-12，大公報 1951-10-19）
- 鄭佩鑫
大成國的反清起義（史學月刊 1958-12）
- 鉄梅
洪楊軼事（石達開，李秀成）（正風 3-5.6, 1936）
- 天嘆
擬建立太平天国洪銅像記（復報 4, 1906）
- 杜德鳳
太平軍在江西的土地政策——關於「天朝田畝制度」与「耕者有其田政策」在江西已否實行問題的商榷（科学与教学 2, 1957）
- 關於「天朝田畝制度」的幾個問題（歷史研究 1960-1.2）^⑮
- 都履和
石達開浙江被困死難紀實（松遼文化 2, 1947）
- 冬
天朝田畝制度（歷史教學問題 1959-3）
- 東霽明
我对「天朝田畝制度」中農業社會主義思想的理解（歷史教學 1955-12）
- 陶英惠
忠王李秀成（中興評論 8-5, 1961）
- 陶天翼
太平天国的「都市公社」（中央研究院歷史語言研究所集刊 31, 1960）
- 湯冰
太平軍与安徽人民的關係（安徽史學通訊 1958-1）
安慶保衛戰——太平軍在安徽的革命關争史實之1（安徽史學通訊 1958-3）
- 湯丹銘
天德皇帝洪大全歌（逸經 28, 1937）
- 董蔡時
試論反革命地主武装「湘軍」的組成及其反動作用（文史哲 1958-11）
- 董作賓
太平天国曆法通信討論——討論之2（羅爾綱共著）（讀書通訊 81, 1959）
- 董異觀
太平天国時期浙江嘉興府的鑄鉛錢（文物 1959-5）
- 鄧衍林
關於太平天国史料史籍集目（圖書館學 9-1, 1935）^⑮
- 鄧之誠
汪梅翁乙丙日記序（燕京大學圖書館報 88, 1936）
湘軍記（桑園讀書之1）（天津益世報 1947-1-21）
- 鄧嗣禹
郭廷以著「太平天国史事日誌」（書評）（天津國民日報一圖書 41, 1947）
- 得衆
太平天国起義百年紀念展覽會中新發現的太平天国文物（上海大公報 1951-2-1）
- 娜琳高娃
太平天国後期的商業政策（歷史教學 1958-4）
南京大學歷史系1956級太平天国史編寫組
太平天国究竟實行了什麼樣的土地政策（江海學刊 1961-8）

2505)
られてい
た日本
月にか
上海,
などと
解を深
ん着の
めてい

4557)
ソ連,
組合総
義革命
ること,
働者の
に北京
たり,
陽,撫
者の勞
視察を
杭州の
合規約)
2資料

・中島

3027)
者14人
小田嶽
中野重
—の
3人が
ぞれの
中国印

隈秀夫
3955)
年の初



- 任崇岳
対「太平天国時期広西左右江僮族人民の反清闘争」一文の批判（史学月刊 1959-4）
- 年子敏
關於「忠王自伝原稿」真偽問題の商榷（東世激共著）（新華半月刊 1957-3）
試論所謂「忠王李秀成自伝」の動機問題（学術月刊 1957-5）
- 馬一行
太平天国運動之興起及其失敗之検討（史地知識 1, 1936）
- 馬少僑
太平天国革命前夕李沅發の起義（歴史教学 1953-2）
太平天国革命時期貴州の苗民起義（歴史教学 52, 1955）
- 馬振文
対太平天国時代白齊文評價の商榷（歴史研究 1958-5）
太平天国の童子兵（歴史研究 1959-4, 史学月刊 1959-8）
- 馬天增
太平天国革命為什麼是資産階級性的農民革命（新史学通訊 1953-7）
太平天国革命是否具有資産階級民主革命的性質？是否有反侵略的意義？（新史学通訊 1956-9）
- 白 蕉
金陵癸甲撫談補（人文 3-2, 1932）
- 麦若鵬
太平天国時代の文学（光明日報 1951-1-6）
- 范烟橋
太平天国時の筆記選録——「燐血叢鈔」（光明日報 1962-8-23）
- 范 城
質言（節録）（近代史資料 1955-3）
- 范 東
太平天国在武漢修建の長江浮橋（光明日報 1957-10-24）
- 范文瀾
金田起義一百周年記念（新建設 3-1, 1950）⑦
紀念太平天国起義一百零五周年（人民日報 1956-1-11, 新華半月刊 77, 1956）⑮
- 潘抱存
略論太平天国領導集團の内訌（文史哲 1957-5）
- 傅衣凌
太平天国時代の全国抗糧潮（財政知識 3-3, 1943）
- 傅樂煥
「從軍日記」与洪大全（歴史教学 2-7, 1951）
- 傅拘石
南京堂子街太平天国壁画の芸術成就及其在中国近代絵画史上的重要性（光明日報 1953-7-16）
- 仏馱耶舍
近出太平天国史料三種（史学雜誌 1-2, 1929）
- 文
江蘇保護和整修太平天国革命遺跡（光明日報 1961-8-14）
- 方永靖
石達開論（遺族校刊 3-3, 1936）
- 方漢奇
太平天国の革命宣伝活動（新聞戦線 1958-3）
- 方詩銘
記太平天国起義百年紀念展覽会中所陳列の石刻石片（上海大公報 1951-2-1）
太平天国革命運動中遺留の石刻（歴史教学 1-5, 1951）
- 包羅金
太平天国時代の俄国報刊論太平天国運動（光明日報 1955-10-24）
- 彭沢益
關於王韜の卒年（申報文史 24, 1948）
關於洪大全の歴史問題（歴史研究 1957-9）
- 茅家琦
対陳恭祿先生「中国近代史」太平天国部分幾個反動論点的批判（江海学刊 1958-9）
太平天国の「田憑」は發給誰の（江海学刊 1961-7）
我对太平天国革命性質的一些看法（南京大学学報人文科学版 1959-1）⑮
太平天国革命後江南農村土地關係試探（新建設 1961-12）
- 北京師範大学歴史系
太平天国革命是什麼性質的（光明日報 1959-4-3）
- 北京師範大学歴史系1956級学生
太平天国革命性質問題的討論（北京師範大学学報 1959-2）⑮
- 璞
關於太平天国革命与性質問題（合肥師範学院学報 1959-1）
- 毛以享
太平天国与天地会（申報月刊 4-1, 1935）
太平天国崛起之因（申報月刊 4-6, 1935）
太平天国の對外政策（時事月報 14-2, 1936）
李鴻章与戈登關於蘇州投降之衝突（東方雜誌 32-

右翼開
東
戦前
である
市代表
という
共と日
意見書
中国の
革強化
る。内
のこと
ほか、
中国視
要人と
記述は

中国を
19
著者
訪申し
で、北
という
理など
徴とい
しかれ
福を願

演劇・
東
市川
聘され
州で1
を旅行
の文を
する言
である
に、4
粵劇、
で伝説
の配役
してき
とも合

- 14, 1936)
- 孟 森
影印曾文正批記李秀成供序 (天津益世報 1936-6-17)
評「太平天国曆法」 (天津益世報 1936-7-30)
- 俞大綱
洪秀全曾師事朱九濤弁 (光華大学半月刊 2-9, 1934)
讀羅爾綱賊情彙纂訂誤後論洪大全事蹟 (北平圖書館館刊 8-4, 1935, 天津光明日報 1934-9-1)
- 余 石
一百年前美帝屠殺中国人民的一群劊子手 (光明日報 1950-12-2)
- 余仲衡
对「太平天国起義錢的發現和經過」一文的弁正 (文物 1959-7)
- 余牧人
太平天国的宗教 (文社月刊 2-9, 1926)
太平天国宗教化的軍事与政治 (文社月刊 3-1, 1927)
- 幼 梧
洪秀全被捕繫獄伝説考謬 (天津益世報 1936-6-21)
向榮, 怡良, 吉爾杭阿会奏克復上海县城摺 (天津益世報 1936-8)
- 姚 琮
太平天国革命運動中外国資本主義的武装干涉 (歴史教学 44, 1954)
- 姚肇浜
江西史学界討論——太平天国鄉官問題 (黄長椿共著) (光明日報 1961-7-8)
- 姚步康
太平天国史料偶記——李秀成供狀校録 (光華大学半月刊 4-5, 1936)
太平天国史料偶記 (光華大学半月刊 4-10, 5-3.4, 7.9, 1936.37)
- 葉 珊
常熟發現太平天国革命文献「欽定士階条例」等書 (光明日報 1957-6-12)
- 楊 松
論太平天国十五年革命战争的經過及其戰略上的錯誤 (群衆 4-12, 1940)
- 羅果夫
車爾尼雪夫斯基論太平天国 (蘇中友好 30, 1958)
- 羅香林
太平天国洪天王家世考 (広州学報 1-2, 1937) ⑬
- 羅爾綱
上太平軍書の黄曉考 (国学季刊 4-2, 1934)
一部新發現の天地会文件鈔本 (北平圖書館館刊 8-4, 1934, 大公報 1934-8-22)
「賊情彙纂」訂誤 (北平圖書館館刊 8-4, 1934)
讀「太平天国詩文鈔」 (図書季刊 1-4, 1934)
太平天国革命的經濟的背景 (天津大公報 1935-1-18)
太平天国革命的醞釀 (天津大公報 1935-2-15)
金田発難 (天津益世報 1935-5-14)
朱九濤与洪秀全 (天津益世報 1935-7-9)
亨丁頓論客家人与太平天国事考 (天津益世報 1935-7-18) ⑭
跋洪秀全宗教弁疑 (天津益世報 1935-7-23)
太平天国史料跋 (天津益世報 1935-10-29)
論近代秘密社会史料的本子 (大公報 1935-10-31)
「太平天国起義記」小考 (大公報 1935-11-21)
張嘉祥与洪秀全關係説考謬 (天津益世報 1935-12-10) ⑮
讀太平天国詔諭 (図書季刊 2-4, 1935, 天津大公報 1936-1-9) ⑯
太平天国天朝田畝制度実施問題 (天津益世報 1936-1-7)
故宮太平天国文書原摺及上論考 (天津益世報 1936-2-18)
太平天国的聖庫制度及諸匠營与典官制度 (天津益世報 1936-3-3)
洪大泉考 (社会科学 1-3, 1936)
李秀成論子姪書跋 (天津益世報 1936-4-28) ⑰
太平軍戰役死亡の鳥瞰 (天津益世報 1936-5-10)
蕭盛遠著「粵匪紀略」之發現 (天津益世報 1936-7-19)
太平天国革命的性質及其失敗の原因 (南京中央日報 1936)
此園自序跋 (天津益世報 1937-1-12)
吳繩海著「太平天国史」 (書評) (中国社会經濟史集刊 5-1, 1937)
讀「太平天国叢書第1集」書後 (中国社会經濟史集刊 5-1, 1937)
皖樵紀実 (天津益世報 1937-3-4)
「賊情彙纂」校勘記 (南京中央日報 1937-4-4) ⑱
王韜手抄謝介鶴「金陵癸甲紀事略」之發現 (天津大公報 1937-4-22)
女營考 (現代学報 1-1, 1947)
太平天国経籍考 (学原 2-1, 1949)
天曆与陰陽曆对照考 (学原 2-6, 1949)
太平天国起義百年紀念在何年? (南京新華日報 1951-1-11)
太平天国起義百年紀念日期的考証 (新建設 3-4,

- 人民日報 1951-1-11)
- 答羅嗣蕃 (歴史教学 24, 1952)
- 証明英美資本主義從開始就進行扼殺太平天国革命的
洋鉄砲の発現 (歴史教学 27, 1952)
- 太平天国英王陳玉成自伝 (歴史教学 28, 1953)
- 一座太平天国の大建築蘇州忠王府 (光明日報 1953
-7-8)
- 太平天国与天地会關係の問題 (歴史教学 37~39,
1954) ⑨
- 与葉菲莫夫教授談太平天国史問題 (文史哲 1954
-5) ⑨
- 金田起義事实考 (歴史研究 1-3, 1954)
- 太平天国文物的新発現 (新觀察 3, 1955)
- 重写太平天国史論文集的自我檢討 (光明日報 1955
-3-3)
- 太平天国の鼓吹曲 (歴史研究 1955-6)
- 人民的力量 (歴史研究 1955-6)
- 上海起義の小刀会劉麗川上天王表 (歴史研究 1955
-6)
- 紹興太平天国壁画調査記 (歴史研究 1956-2) ⑭
- 「李秀成自伝原稿」所記向太平天国提出平分中国陰
謀外交の侵略者和時間的箋証 (歴史研究 1956
-3)
- 浙東起義佃農参加太平天国 (歴史研究 1956-4)
- 南京如意里太平天国壁画考証 (歴史研究 1956-3)
⑭
- 波山艇与紅単船 (歴史研究 1956-7)
- 論太平天国の壁画 (新建設 1956-8) ⑭
- 太平天国為什麼准絵人物? (新建設 1956-10)
- 太平天国真是不准絵人物嗎? (文史哲 1956-11)
- 讀「關於績溪曹氏支祠の壁画是太平天国嫡系部隊所
絵の考証」書後 (安徽史学通訊 1957-10)
- 績溪曹氏支祠太平天国壁画考証 (安徽歴史学報 1,
1957) ⑭
- 關於太平天国壁画不准人物的問題 (文史哲 1957-
11) ⑭
- 楊柳青発現の太平天国年画考証 (文物 1959-5)
- 太平天国曆法通信討論——討論之2 (董作賓共著)
(読書通訊 1959-81)
- 太平天国志 (光明日報 1961-7-30)
- 曾國藩咨送軍機処的李秀成自述補抄部分の発現 (新
建設 1961-12, 光明日報 1961-12-22)
- 關於我写李秀成自述考証の幾点説明 (歴史研究 19
63-4)
- 湘鄉曾氏藏忠王李秀成原供考証 (社会經濟 8-1) ⑬
- 太平天国對於近代中国的兵制及政治の影響 (南京中
央日報)
- 向荣奏疏中之太平天国史料 (南京中央日報) ⑩
- 太平天国對於中国近代財政上幾個变政的關係 (南京
中央日報)
- 東北兩王内訌考 (現代学報 1-1)
- 羅慕婉
洪秀全の卒日 (天津益世報 1936-10-12)
- 羅 邕
太平軍軍器刻辭随記 (逸経 19, 1936)
- 雜談太平天国文学 (天風 1, 1937)
- 来新夏
「天朝田畝制度」是農民革命的綱領 (光明日報 19
59-12-10) ⑮
- 藍文卿
關於太平天国金田村起義日期問題 (光明日報 1951
-1-16)
- 李科友
新收集的兩件太平天国安民布告 (文物 1962-2)
- 李介丞
太平軍北溪之敗紀実 (逸経 35, 1937)
- 李漢英
太平軍在粵東の戦鬪 (光明日報 1955-1-20)
- 李奇流
太平天国之興起及其没落 (汗血月刊 3-3, 1934)
- 李競能
論洪仁玕の資政新篇 (歴史研究 1959-12)
- 李桂海
有關於太平天国革命的幾個問題的討論 (梁英明共著)
(光明日報 1961-6-7)
- 李国環
太平天国忠王李秀成供詞并跋 (学風 7-5, 1937)
- 李祖桓
對鄒知白「李永和藍朝鼎起義始末」一文的商榷及補
充 (歴史研究 1956-12)
- 李崇惠
石達開日記之研究 (史学年報 1, 1929)
- 李得賢
湘軍志与湘軍記 (文史雜誌 4-3.4, 1944)
- 李文治
太平天国革命對变革封建生産關係的作用 (光明日報
1961-1-16)
- 鄺 純
關於幼東王是否天王第五子の問題 (史学月刊 1957
-1)
- 略論太平天国の田賦制度 (文史哲 1957-5)
- 太平天国後期官制探略 (山西師範学院学報 3, 19
57)

ろ農業
現状を
化を中
書が中
書かれて

前進する
東京

1955年

てきた日
旬から6
農林中金
が、広州
重慶、成
た農業協
業生産協
農村信用
られてい
を説明す
協同化の
における
る。代表
衆議院議
幸博、坂
田恒雄、

中国農村
て 富
東京

1955年
一員とし
代表者で
上海、杭
中国農業
ている。
産・供銷
に見学し
ている。
紀行文的

社会主義
大内兵衛

東京
本書は



- 太平天国对上海小刀会起義運動的態度問題 (史学月刊 1958-2)
- 洪秀全領導太平天国革命的功過問題 (史学月刊 1958-6)
- 鄺禄遒
太平天国的供給制度 (文史哲 1954-11)
- 柳学啓
太平天国革命是帶有資產階級民主革命性質的農民戰爭 (華中師範学院学报 3, 1959) ⑮
- 劉永長
介紹太平天国門牌的新史料 (歷史研究 1957-10)
- 劉瑛之
評忠王李秀成自伝原稿箋証 (歷史教学 2-1, 1951)
- 劉堯漢
太平天国革命的一支洪流——雲南哀牢山彝民起義軍的土地綱領和塩鉄等經濟措地 (光明日報 1961-4-10)
- 劉桂五
百年前人民的武装組織——太平軍 (新建設 3-1, 1950) ⑦
- 劉工夫
石達開西征主力部隊進軍路綫弁 (史学月刊 1959-4)
- 劉興唐
站在社会学之見地解析太平天国的農民革命 (文化批判 1-3, 1934)
- 劉佐泉
關於太平天国革命特点的形成問題 (歷史研究 1956-3)
- 劉日波
關於太平天国文献中「揮」字意義的解釋 (歷史研究 1956-7)
- 劉祝封
金錢会紀略 (近代史資料 3, 1955)
- 劉春和
太平天国詩補 (人間世 40, 1935)
- 劉序功
旺川攻城壁画是太平軍勝利攻克旌德县城考 (安徽史学通訊 1959-1)
- 太平天国遵王賴文光的戰力及其有關問題 (文物 1959-5)
- 一張太平天国的通商執照 (文物 1960-1)
- 劉成禺
自題太平天国戰史本事 (逸經 24, 1936)
- 劉大年
中国近代史研究中的幾個問題 (歷史研究 1959-10) ⑮
- 劉鳳翰
湘軍制度的淵源和影響 (大学生活 3-4, 1932)
- 劉嵐山
從一首太平軍墻頭詩談起 (民間文学 1959-3)
- 龍盛運
太平天国後期土地制度的實施問題 (歷史研究 1958-2)
- 關於太平天国史研究工作中的偏向問題 (光明日報 1958-12-3)
- 凌崇征
訪太平天国革命的搖籃——金田村 (光明日報 1961-1-13)
- 梁英明
有關太平天国革命的幾個問題討論 (李桂海共著) (光明日報 1961-6-7)
- 梁如盧
太平天国之移民政策 (族行雜誌 17-2, 1943)
- 梁任葆
金田起義和少数民族 (光明日報 1955-7-7)
- 太平天国時代大成国起義軍致外国侵略者的知照 (光明日報 1955-9-15)
- 太平天国時代大成国隆国公黃鼎鳳告諭 (光明日報 1955-9-29)
- 金田起義前廣西的土地問題 (歷史教学 1956-7)
- 太平天国和上海小刀会關係的商榷 (歷史教学 1957-2)
- 太平天国和砮工 (歷史教学 1957-5)
- 新發現太平天国建国永安時期的兩件文物 (廣西日報 1957-6-28)
- 石達開回廣西的鬭爭及其和大成国的關係 (歷史研究 1957-9)
- 金田起義前廣西的農民起義 (歷史教学 1957-10)
- 太平軍復永安時期的肅清内部反革命分子鬭爭 (史学月刊 1957-10)
- 梁方仲
易知由單的研究 (嶺南学报 11-2, 1951)
- 梁廉夫
潜齋見聞隨筆 (近代史資料 1, 1955)
- 廖和
論太平天国的軍隊規律 (中国陸軍装甲兵 10-10, 11, 12, 1960.61)
- 金田之戰 (中国陸軍装甲兵 11-4, 1961)
- 林幹
太平天国末期陝甘寧青回民革命 (新史学通訊 1953)
- 太平天国時期雲南的回民革命 (新史学通訊 1953)
- 林言椒

4
3]
見察
見察
木茂
北京
して
天壇
との
びの
察し
青,
この
襲疑
の大
の対
同行
65]
術文
慶節
、杭
開し
の模
、新
、各
ろう
難者
ての
。安
十二、
原昌
619]
人民保
955年
記録で
順、
〔人
東選
報告〕
はむし



- 関于太平天国革命性質問題的討論（史学月刊 1960-7）
- 建国以来太平天国史的研究和史料整理概述（光明日報 1961-1-5）
- 林樹恵
捻軍与太平軍余部合流後の抗清闘争（歴史教学 37, 1954）
- 林明
太平軍金田団營歌（民間文学集刊 9, 1959）
- 伶俐
太平天国的茶絲輸出貿易（歴史教学 1956-5）
- 黎子耀
- 英美資本家は太平天国起義的絞殺者（巴拉羅夫斯基原著）（歴史教学 1952-9.10）
- 呂振羽
偉大民族民主革命的開端——太平天国革命運動（学習生活 1-3.4.5, 1951）
- 路工
太平天国革命的火花（民間文学 1959-3）
- 路遙
論洪仁玕（文史哲 1956-1）
- 盧心銘
翼王石達開（光明日報 1963-6-25）

新刊紹介

ソヴェト紀行 徳永直

東京 角川書店 1957 228 p. [5020]

著者は岩上順一とともに、1954年12月に開かれた第2回全ソ作家大会に招待をうけて出席した。その後約2カ月モスクワに、さらに中国に入って北京に1カ月程滞留して、1955年3月帰国した。本書はこの旅行の記録であるが、ソ連に関する記述の方が多い。中国に関しては、北京で紡績工場、染色工場、麻のハンカチをつくる合作社を見学した時のこと、周揚、老舍、田漢、趙樹理、白朗、その他数人の作家に会った時の印象と彼らの経歴について述べている。最後に、帰国後「人民日報」に求められて書いた感想文と全ソ作家大会の報告をのせている。

太平天国全史 簡又文著

香港 簡氏猛進書屋 1962 3冊

著者は30余年もの間、太平天国の研究に従事する学者で、本誌3,4頁に掲げた雑誌論文のほか、「太平天国雑記」2冊（1936, 1944）、「太平軍広西首義史」（1944）、「太平天国典制通考」3冊（1958）などの専著がある。本書はこの種のすでに発表された研究、最近の研究を集大成して、太平天国の興起から滅亡までを29章2318頁の大冊にまとめたもので、著者における太平天国全史の決定版ともいべきものである。

太平天国制度初探（増訂本） 鄺純著

北京 中華書局 1963 551 p.

鄺純の前著である「太平天国制度初探」（北京、人民出版社、1956年、175頁）と「太平天国官制軍制探略」（上海人民出版社、1958年、136頁）を併せて改訂増補したもの。その構成は次の通りである。

1) 経済理想和具体措施, 2) 官制軍制, 3) 郷官制度, 4) 賦税制度, 5) 供給制度, 6) 教育考試制度及其有關政策, 7) 天京的社會組織和生活制度。

(2)は前著の「太平天国官制軍制探略」を改訂し、翼王の官制を新たに書き加えたもの。他は「太平天国制度初探」の改訂であるが、(1)は全面的に書き改められ詳しくなっている。また(7)の最後に「天京の人口数量和兵力配備」の一節が増補されている。巻末の後記は、この増訂本を書き上げて後、新たに資料を発見して8ヶ所の訂正すべき点があられたので、それを追記したものである。

太平軍在永安 鍾文典著

北京 三聯書店 1962 176 p.

1851年1月広西省桂平県金田村に起義した太平天国軍は、同年9月、永安州（今の蒙山県）を占領、翌1852年4月まで約半年間この町を占領した。著者は広西師範学院の教官、1956年兩次にわたり蒙山およびその近傍の地を实地調査し、文書および口頭の關係資料を集めた。これを基にして永安時代の太平天国を研究したのが本書。巻頭に写真8葉、地図2枚あり、巻末に、「太平天国革命的基本群衆」「太平天国和僮、瑤族人民」、「太平天国和天地会」の3論文をおさめる。

日本人の新中国旅行記

は し が き

- 1) この解説は、1949年中華人民共和国成立以後に同国を旅行した日本人の旅行記を集め、簡単な解説文を附したものである。
- 2) 旅行記は雑誌にも数多く発表されているが、茲では東洋文庫近代中国研究室別置の単行本だけを扱った。
- 3) 解説するにあたっては、訪中の時期、訪れた場所、同行者、目的をできる限り明らかにした。
- 4) 中国以外の国の旅行記を含んでいるものは、その旨を記すにとどめた。
- 5) 排列は訪中時期の順によつた。ただし、同一グループの場合は書名の音順とした。最後の4篇は原稿締切り後に入手したものである。
- 6) 図書に関する記載事項は、書名、編著者名、出版地、出版社、出版年、頁数で、〔 〕の中は排架番号である。
- 7) この解説は、東洋文庫近代中国研究室でまとめたものである。

ソ連・中国紀行 帆足 計

東京 河出書房 1952 366 p. [3608]

著者は1952年4月11日、羽田を発つて農業視察のためコペンハーゲンに向かった。同行者は宮腰喜助（改進黨代議士）と秘書1名。デンマークの農業実態を見聞した後ソ連に赴き、ここで高良とみと合流し、国際経済会議中国代表南漢宸の招待により中国に入り、5月15日から約1カ月間北京を中心に上海、杭州、武漢、沙市、南京などを訪れた。また6月1日には日中貿易協定を調印した。本書の前半はコペンハーゲンとソ連の紀行文、後半が中国旅行と日中貿易協定についての記述である。北京や上海の生活状態、農村や国営機械化農場の視察、工場、学校、治水工事の見学、景勝地および演劇見物など多方面の記述のほか、新中国政権や党風の説明、南漢宸、沈鈞儒、冀朝鼎、雷任民、章乃器、劉寧一その他多数人との会談の様子も含まれている。著者が本書で最も留意しているのは平和と貿易の問題のようで、アジア太平洋地域平和会議準備委員会に出席したこと、日中貿易協定に調印したことを記録するほか、平和と貿易の問題を、いろいろな文献やデータを引用しながら述べている。

私は見て来た、ソ連・中共 高良とみ

東京 朝日新聞社 1952 200 p. [3514]

著者は参議院議員。1952年3月末から7月にかけてヨーロッパ、ソ連、中国をまわつてきた。ソ連、中国行きは予定外の行動であつたので、当時大きな反響を呼び、その帰国報告は注目された。本書の前半はモスクワにおける国際経済会議に単独で出席したのち、ソ連国内を旅行した見聞記。中国には、6月始めに北京で開かれたアジア太平洋地域平和会議準備委員会に前参議院議員帆足計、衆議院議員宮腰喜助と共に日本代表として出席するため入国した。会議後6月末まで中国に留まつたようで、北京、上海を訪れた視察報告がある。北京では市内の改善された衛生状態、郊外農村の合作社組織など改革の模様、上海では人民法院における裁判のやり方を観察している。その他、新中国の婦人活動、大規模な治水、植林事業の実情がかなりのデータをあげて説明されている。

中国 南 博

東京 光文社 1953 202 p. [4847]

1952年パリで開催された社会心理学会に出席した著者は、帰途北京へ立寄つて10月2日から13日まで開かれたアジア太平洋地域平和会議に出席し、会議後約3週間北京市内外の教育の実情を視察した。本書はこのときの中国旅行記で、著者は、中国、ソ連に対して『べたばれ』あるいは『食わずぎらい』になりがちな日本人の態度を批判し、公平、冷静に見学し記録したという。社会主義建設中の中国のあらゆる面における教育の実情が具体的にわかりやすく書かれている。なお最後に、平和会議の様子、種々の決議文が採択されるまでの過程を記し、附録として「北京平和会議の決議文」を収録している。

はたらくものの国——新中国をつくる原動力 西園寺公一等著

東京 理論社 1953 222 p. 図版 [4867]

5部から成る。第1は1953年まで中国人の妻として四川省にいた井関けい子の体験記。第2は、1953年3月アジア太平洋地域日本平和連絡会の労働者代表として、第1次帰国者を迎えに天津に赴いた山田長吉の労働者の眼で見てきた話。第3は、中国進出口会社の招きで1952年12月19日～1953年2月頃まで訪中した東邦商会社長白水実の企業家としての見聞記。第4は、1953年頃中国に行つた参議院議員西園寺公一が、天津、北京の子供、学生、学びつつ働く人々の姿を中心に記したもの。第5は本橋渥が文献から調べて中国労働者の生活を記す。

赤い歯車——ソ連・中共の産業をみる 松前重義

東京 読売新聞社 1954 222 p. 図版 [4466]

科学者であり、衆議院議員である著者（現在、東海大学学長）は、この原子力時代にいかに平和を実現させるかを念頭に、1954年6月から約2カ月間東南アジア、ヨーロッパ、ソ連、中国を歴訪した。本書はその時の記録であるが、副題の示すようにその大部分はソ連、中国にあてられている。中国の部は今回の10日間の北京滞在と前年の国慶節前後約1カ月の北京滞在の記録をあわせたものであるが、いわゆる見聞録ではない。教育、農村と農業教育、国土開発、社会保障、思想統一運動の面から中国の現状を述べ、また中国進出口会社総経理盧緒章の中国貿易についての説明および郭沫若との会見も収められている。

黄河は青くなる——新中国紀行 鈴木 充

東京 黎明書房 1955 225 p. 図版 [4394]

15名からなる日本新聞放送中国視察団は、中国新聞工作者連誼会の招待で、1954年7月24日から9月3日にわたり、北京を中心に天津、ハルビン、長春、瀋陽、撫順、鞍山、上海、武漢、広州の各地を視察した。本書はその視察団の一員であった著者が、現地から新聞社に送ったルポルタージュを集めたもの。前半はかつて著者がみた古い中国と比較しながら新中国の変化を印象記風に描き、後半はかかる変化の原因とこれからどうなるかについて述べている。その間に、著者は、周恩来、郭沫若、張奚若、李徳全らとの会見を記している。

中共見聞記 須磨弥吉郎

東京 産業経済新聞社 1955 220 p. 図版 [4287]

著者は、1954年国慶節に招待された国会議員各党代表団に日本自由党の代表として参加し、約1カ月、広州、北京、上海、瀋陽、鞍山、撫順などをめぐっている。本書はこの旅行の見聞報告であるが、単に見聞を記すだけではない。著者は外交官として長く中国に在留している。今回の旅行は18年ぶりの中国訪問で、古い中国と対比しながら変貌した新中国に対する印象、感懐を述べている。また傅作儀、蔡廷楷、齊白石、梅蘭芳など、政界、芸能、芸術界に旧知が多く、この旅行の際にも様々な人に再会してその消息を伝えている。特に、中国をめぐる国際問題——日中関係、中ソ関係、中英関係、台湾問題などについて著者の見解がかなりの頁をさいて語られているのが目立つ。写真のかわりに著者自身のスケッチが数多く載せられているのが面白い。

保守党から見た新中国 山口喜久一郎

東京 読売新聞社 1955 141 p. 図版 [4083]

著者は、1954年の国慶節に正式招待を受けた中国視察国会議員団の団長で、自由党代表者の1人である。視察団は議員31名よりなり、須磨弥吉郎、川上貫一、鈴木茂三郎らの名もみえる。一行は9月26日から1カ月、北京を中心に広州、瀋陽、鞍山、撫順、上海などを見聞している。本書の前半は中国各地の印象記で、万寿山、天壇などの見学、大学・工場・炭田の視察、日本人戦犯との面会の模様、周恩来との日中問題懇談、西湖の舟遊びの印象深さなどが語られている。後半は、新中国を視察して得たこと、すなわち政府の歓迎態度、労働者の実情、経済建設、農業事情、対日平和政策を論じている。この論は（前半の視察記も合せて）中国に対して非常に懐疑的で、中国に見習う点はほとんどないという。昔日の大日本帝国を懐かしんでいる感がある。最後に周恩来の対日方針演説が19頁にわたって載せられている。また同行した近藤日出造の挿絵が色彩りを添えている。

新中国見聞記 大谷瑩潤

東京 河出書房 1955 143 p. [3065]

1954年の国慶節に、安倍能成を団長とする中国学術文化視察団の一員として招待された著者の見聞記。国慶節前後の約1カ月間、北京をはじめ天津、西安、上海、杭州、広州の各地を視察したが、その旅程に従って見聞したところの社会施設、文教機関や都市、農村の生活の様子がよく紹介されている。特に宗教人である著者は、新中国の宗教のあり方に大きな関心を寄せているので、各地で寺院を訪れ、僧侶と会談し、宗教界の現状を知ろうとつとめている。また著者はこれまで中国人俘虜殉難者遺骨の送還のためにつくしているもので、それについての話合いの様子も見られる。同行者は次の14名である。安倍能成、阿部知二、奥野信太郎、貝塚茂樹、風早八十二、戒能通孝、倉石武四郎、近藤日出造、小沢正元、菅原昌人、裕伊之助、吉野源三郎、和達清夫、藤田敬三。

中国の農業 吉岡金市

東京 東洋経済新報社 1957 215 p. [3619]

現在、農業経営研究所を主宰する著者が、中国人民保衛世界和平委員会の招きで中国を訪問したのは、1955年4月20日から約2カ月間である。本書はこの時の記録であるが、現地の視察（広州、武漢、北京、瀋陽、撫順、鞍山、天津、南京、上海、杭州など）と文献資料（「人民中国」の諸論文、「土地改革関係資料集」「毛沢東選集」「劉少奇著作集」「中国共産党第八回大会政治報告」など）をもとに書かれていて、旅行記というよりはむしろ



ろ農業の専門書に近いものである。まず新中国の農業の現状をあきらかにし、次に具体的に土地改革と農業協同化を中心に中国の農業の解放後の発展をのべている。本書が中国の農業と日本及びソ連の農業との比較において書かれているのも一つの特徴といえよう。

前進する中国の農業協同組合 織井齊・坂井治吉共編
東京 東洋経済新報社 1955 228 p. 図版

[3504]

1955年の中国における農業協同化の現状を実地見聞してきた日本の農業団体の代表による報告。1955年4月下旬から6月下旬にかけ、農協中央会、全購連、全販連、農林中金、全国金融協会、家の光協会等を代表する13名が、広州、武漢、北京、瀋陽、天津、無錫、上海、杭州、重慶、成都と広く中国各地を見てきた。その結果得られた農業協同化の三つの形、すなわち農業生産合作社（農業生産協同組合）、供銷合作社（購買販売農業協同組合）、農村信用合作社（農村信用協同組合）について詳細に語られている。実際に見学した報告のほか、全体的な現状を説明する資料、組織のしくみの解説などもくわしく、協同化の今後の展望も含まれていて、この年代の段階における中国農業協同化について知るのによい書である。代表団のメンバーはつぎのとおり。小川豊明（団長衆議院議員、全購連嘱託）、多賀谷松雄、織井齊、熊谷幸博、坂井治吉、厨大弐、富田金吾、船橋磯右衛門、池田恒雄、井野隆一、小林徹、佐藤剛弘、西村公克。

中国農村をたずねて——訪華日本農業代表団の一員として 富田金吾

東京 新紀元社 1956 175 p. 図版 [4870]

1955年4月～6月の50日間を、訪中日本農業代表団の一員として視察した中国紀行。著者は家の光協会からの代表者である。広州、武漢、北京、瀋陽、天津、無錫、上海、杭州、重慶、成都などの農村を訪問し、解放後の中国農業の政策、合作社運動や農民生活の実情を紹介している。前篇では、解放前の農民の悲惨な生活、農業生産・供銷・農村信用合作社の三つの合作社の説明、実地に見学した農村の状況が具体的にデータをあげて説かれている。後篇は、著者が各地で見聞し感じたことなどが紀行文的に書かれている。

社会主義はどういう現実か——ソ連・中国旅日記 大内兵衛

東京 岩波書店 1956 198 p. 図版 [4848]

本書は1955年5月～6月に日本学術会議のソ連中国学

術視察団の一員として両国を訪問した著者の旅日記と報告文である。旅日記は5月7日羽田発から始まり、モスクワの学界視察と諸文化施設見学の模様が書かれている。北京入りは6月4日で、ここでも各学界の要人との会見記や北京・人民・中山・復旦大学訪問、経済研究所見学など研究機関、学者の消息を伝える記事が多い。主として北京と上海を視察し、帰途南京、武漢、広州に立寄っている。郭沫若、胡繩、狄超白、周恩来、陳毅、宋慶齡らと会談している。報告文では、ソ連、中国の経済発展及び経済学がいかなるものかを「経済学教科書」などの例を引いて平易に説いている。なお同行者は、茅誠司、桑原武夫、長田新、南原繁、菊池勇夫、名和統一、江上不二夫、宮地伝三郎、青山秀三郎、矢野勝正、浅見与七、野口弥吉、長谷川秀治、武藤完雄の14名である。

ソ連・中国の印象 桑原武夫

京都 人文書院 1955 264 p. 図版 [3414]

本書は、フランス文学者である著者が訪ソ訪中學術視察団に加わり、1955年5月からソ連、中国を3週間ずつ見学した時の印象をまとめたものである。旅行中「朝日新聞」に書き送った通信、新聞社からのアンケートの回答、旅行後の講演記録、「世界」、「新潮」、「文芸春秋」に発表した記事が主となり、さらに新しく書き加えられた文も含まれている。両国の文化政策、大学、研究所の現状、文学、演劇、等々に関する記述が多い。なお中国では、北京のほか武漢、重慶、成都も訪れている。

ソ連と中国 南原 繁

東京 中央公論社 1955 145 p. [4906]

1955年の學術視察団に加わってソ連と中国を訪れた著者が、その時の感想をまとめたものである。旅行の全体を述べたものではなく、ソ連ではモスクワ大学200年祭に出席したことなど、中国では周恩来、郭沫若、そのほか一行の接待をしてくれた人々のことを書いている。さらに諸施設の視察結果を報告しながら、両国における政治と宗教、学問上の自由について著者の見解が披瀝されている。著者の詠んだ和歌も十余首おさめられている。

先生のみたソ連・中国 菊地定則

東京 淡路書房 1956 220 p. 図版 [4085]

1955年6月ヘルシンキで開催された世界平和集會に日本代表の1人として参加した後、ソ連と中国を訪問した著者の見聞記。もと満鉄の技術員であった著者は、みごとに転身した清潔な中国に仰天する。また北京の万寿山、故宮博物館等の見学や演劇観賞を通して文化遺産の

管理保存にまで国家が非常な努力を払っていることに感心し、大衆の信頼を受けている政治についてあらためて考えている。著者がもつとも関心をもつて見てきたのは教育事情で、十分な施設がある学校を見学し、教育に重点を置いている政治を見るにつけ、日本の現状と比較して暗い気持ちになると述べている。

おとなりの新世界 高木健夫

東京 読売新聞社 1956 226 p. [4865]

著者は読売新聞社編集局次長。1955年7月下旬から9月初までの46日間、中国の新聞工作者連誼会の招待により、日本新聞放送中国視察団の一員として訪中した時のルポルタージュ。北京が新中国を象徴しているとの考えから、著者の筆は殆ど北京に留っており、上海や東北地方の様子は僅かにふれられているのみ。戦前「華北日報」主筆として中国にあつた著者は、旧中国と比較しながら労働者の国における人々の生活様式や風俗を述べ、また全国人民代表大会や北京市監獄の様子、中国の新聞の性格等によつて新中国を描き出している。だが総じて著者はかつての中国に郷愁をおぼえるらしく、そのような描写があちこちに見られる。

中共拝見 門田 勲

東京 朝日新聞社 1955 122 p. 図版 [3616]

著者は朝日新聞社の記者で、1955年7月中旬から9月はじめにかけて、日本新聞放送中国視察団の一員として訪中した。この書は、北京の名所を見学し、上海の南京路を歩き、天津の公私合営の織物会社、国営の製紙工場を視察した時々の、著者の目にふれ、心を捕えた新しい中国の姿を、メモ的に項目別に列挙したものである。著者は、中国の新聞の特長を投書欄に見出し、また広大な中国大陸を旅しているうちに中国人の穏歩主義という国民性はこういう風土から産出されたものかと感心する。しかし何よりも深く印象づけられたのは、撫順の戦犯収容所を訪れた時であると著者は述懐する。もうひとつ旅の思い出として著者に残つたものは、誇りと希望に燃えていた中国の青年たちであつた。

招かれて見た中共 橘 善守

東京 毎日新聞社 1956 206 p. 図版 [4615]

著者は毎日新聞の編集局次長で、過去約20年間、中国関係の部署にあつた。1955年7月下旬より9月初まで日本新聞放送中国視察団の一員として、北京、上海、武漢、東北地方をまわつて諸施設をみ、各界要人にも会つている。非常に混乱している日本人の中国観を是正し、

ありのままの中国をとらえるという意図のもとに、全体はルポルタージュ風に描かれている。内容は第1次5カ年計画の途次にある建設の状況、思想改造、労働者や婦人の様子から外交政策、首脳部のポートレートまで、広汎にわたっている。著者は、物の見方や考え方、そのもたらす生活慣習の変化の大きさに注目し、訪中した日本人はこの気魄のものすごさに圧倒されるだろうと感じている。本書の最後の2章は、著者の日本工業クラブにおける講演要旨と中国を訪問して帰国した片山哲氏との対談の記録にあてられている。

中ソひとり歩き 辻 政信

東京 河出書房 1955 273 p. 図版 [4291]

各党代表38名から成る訪ソ議員団の一員として、中国経由でソ連を訪問した1955年8月下旬から40日間の旅行記録。従つて中国滞在は、訪ソの前後に通る広州、武漢、北京に約10日間のみ。中国視察は主な目的ではなかつたから、その記録は僅か30頁があてられているにすぎない。著者は中国語もロシア語も話せるので、早朝や夜ひとりで街に出て通りかかる人々に職業、収入、戦争の経験を尋ね歩いた。これを公式の視察や会見の記録、感想と合せて旅行中毎日書きとめたのが本書で、『生々しい印象』という点に意義をもたせている。中国については全人民が新しい建設に集中して働き、自信をもっている点に感心し、ソ連と異なり古い伝統の上に新しい文明を培養しようとする中国に親しみをもつた。だが著者は、共産主義のモデルを両国の政治、経済、教育の上に発見することはできなかつたと述べている。

モスコー・北京——訪ソ・訪中国民使節団の思い出
野溝 勝

東京 日本農林水産経済研究所 1959 79 p. 図版 [4213]

著者は社会党の代表として1955年8月の訪ソ議員団に参加した。訪ソの行き帰りに立寄つた中国では、日中貿易問題について雷任民等と、抑留者問題について李徳全らと話し合い、また国慶節参列後、周首相と台湾問題、貿易、戦犯問題等について会談した。本書はソ連篇と中国篇に分れている。中国篇には、前記各要人との会談が各問題を整理しながら、要領よく記されている。また、抑留、戦犯のことは人道上的問題であるとして、両国に特別な扱いを望んでいる著者の主張は、全編にみながつている。巻末にスナップ集が附録されている。



右翼開眼——中共と日共 津久井竜雄

東京 拓文館 1956 222 p. 図版 [4735]

戦前愛国革新運動に参画し、現在も「国論」の主宰者である著者は1955年9月より約1ヵ月にわたって六大都市代表団の一員として中国を訪れた。本書はその見聞記というよりも、共産主義社会と資本主義社会あるいは中共と日共の比較であり、著者の意図する日本改革の為の意見書でもある。現在の日本に絶望している著者は、新中国の颯爽たる雰囲気にもふれて憂を一掃し、日本を改革強化する上に中国に示唆的なことが多いと結論している。内容は新中国の原動力、農業・企業の在り方、軍備のこと、日本と中国の自由のこと、中共と日共の比較のほか、高木健夫、辻政信、桑原武夫、サムウオトンらの中国観の批判、日本民族主義の要請にも言及している。要人と会見し、各地を見聞しているようだが、それらの記述はほとんどみられない。

中国を見て 杉戸 清

1955 38 p. 図版 地図 [4844]

著者は名古屋市水道局長で、1955年9月から約1ヵ月訪中した。一行は六大都市議員と京都市長ら総勢47名で、北京、瀋陽、鞍山、撫順、天津、南京、上海、広州という順序で見学している。著者が上下水道、塵芥の処理などに特に関心をもって見学しているのが、本書の特徴といえよう。著者は最後に、新中国には強力な統制がしかれ、日本とは主義政策を異にしているが、人民の幸福を願う点に変わりはないと感想をのべている。

演劇・北京——東京 戸板康二

東京 村山書店 1956 266 p. [4845]

市川猿之助劇団(61名)は中国人民対外文化協会に招聘されて1955年9月28日から1ヵ月間、北京、上海、広州で14回の公演を行つた。著者はこれに同行した。中国を旅行中に、日本の新聞に通信を送り、帰国後も幾つかの文を書いた。これに、翌1956年5月来日した京劇に関する記事、その他評論や随筆を集めてまとめたのが本書である。旅行中の猿之助のこと、その公演の様子とともに、4つの演劇学校を見学し、京劇をはじめ話劇、越劇、粵劇、滬劇を見た時のことを記している。そして、中国で伝統の保存、俳優の芸の鍛練が重要視され、そのための配慮が十分になされていることを、著者は日本と比較して羨ましく思つたという。一行が非常に優遇されたことも含めて、この公演旅行の意義を高く評価している。

敦煌美術の旅 北川桃雄

東京 雪華社 1963 229 p. 図版 [4841]

雪舟等楊歿後450年記念典が北京でもよおされ、その会に日本の美術代表者が招待された。山口蓬春、橋本明治夫妻と著者である。本書はこの時訪れた著者の敦煌美術紀行である。著者は1956年8月1日に羽田を出発し、雪舟記念典の終了後の9月4日に亀田東伍と共に敦煌に向かった。飛行途上に立寄つた太原、西安、蘭州、酒泉の風景や生活状況、その後ジープで走つたゴビタンの殺伐たる風景と玉門、安西のオアシス都市の印象が日記風に記述されている。以上の紀行部分は、本書全体の3分の1で、あとは敦煌の町やシルクロードのこと、この書の本命である石窟芸術で占められている。敦煌石窟の概観、大雄宝殿の2大仏、北・西魏窟、隋や唐代の石窟や壁画、仏像などの説明がかなり専門的ではあるが平易に書かれている。全体に故事を織りまぜ、写真やスケッチも豊富で楽しい読物である。巻末に敦煌余録が収載されている。なお著者は1960年にも訪中している。

差し向かいの毛沢東——中共首脳部の肚を叩く
土居明夫

東京 鏡浦書房 1957 267 p. 図版 [3067]

1956年8月9日から9月15日まで、中国外交学会の招待による中華人民共和国訪問旧軍人団の一員として訪中した時の記録。一行は旧陸海軍の中將、大佐、少佐ら15名。著者は関東軍情報部長、上海第13軍参謀長など歴任の後、1945年から2年間南京の国民政府国防部顧問を勤めた人である。北京市の農業合作社、東北の工場、大連の海軍学校、上海中学などを視察したが、全般的に革命直後と比べて『雪融け』の状況にあり、中国独自の『東洋的』な道を進んでいると、著者はみている。だが本書の特色は、毛沢東、周恩来、陳毅らとの会見記録に全体の3分の1を使っていることである。著者の訪中目的は中国首脳部の肚を知り、日中友好の基盤の有無をみることで、この点を会談を通じて詳細に述べている。さらに著者の知り得たとする中国の対日観、対日政策の真意と著者の論が展開されている。同行者：遠藤三郎、金沢正夫、堀毛一鷹、茂川秀和、景山誠一、岡崎文勲、真山寛二、宮子実、町野誠之、犬飼総一郎、多田伊勢男、内野治嘉、金子陸奥三、清水廉。

元軍人の見た中共——新中国の政治・経済・文化・思想の実態 遠藤三郎等著

東京 文理書院 1956 221 p. [4071]

かつての中国に対し直接の敵対関係にあつた元軍人が、毛沢東の招きに応じて、1956年8,9月訪中した時の

報告である。参加者中、遠藤三郎（陸軍中将）、土居明夫（陸軍中将）、堀毛一麿（陸軍中将）、犬飼総一郎（陸軍少佐）、景山誠一（陸軍大佐）、内野治嘉（陸軍少佐）、岡崎文勲（海軍大佐）、多田伊勢男（陸軍少佐）の8名が執筆しており、中国の政治、経済、貿易、国民生活などについてそれぞれの見聞と意見がのべられている。一行の中には主義思想が中国と全く反対の者も多く、当初は非常に警戒的な態度であるが、時間の経過と、熱心な質疑討論の中に次第に理解し合えるようになり、一日も早く国交が回復されるのを切望するというのが大半の結論のようである。一行の会った要人は毛沢東、周恩来、陳毅、彭德懷などの最高指導者から、廖承志、趙安博などの中堅幹部にまで及んでいる。

新中国風土記 小宮義孝

東京 メヂカルフレンド社 1958 173 p. [3393]

国立予防衛生研究所寄生虫部長である著者が、住血吸虫病の予防及び治療対策の援助のため、1956年9月末から約2カ月半、中国に赴き北京、上海、南京、武漢、広州の視察調査を行った。視察の中心は住血吸虫病であったが、むしろ新中国の医学教育制度に興味をもって見学しているようである。本書はこの時の記録である。終戦前約15年上海に住み、もとの上海自然科学研究所（今の中国科学院）に勤めていたので、中国への郷愁が強い。したがって本書でも、古い中国と新しい中国を常に対比させ、古い中国の面影が段々失われて行くのを淋しく思っている。しかし同時に新しい中国の発展に目を見はつている様子がうかがえる。著者の撮した写真も多く撮られている。

点・線・天——以前の中国と今の中国 草野心平

東京 ダヴィッド社 1957 216 p. 図版 [4094]

1956年9月から11月にかけて、中国の対外文化協会、作家協会からの招待を受けて、23名からなる日本文化人中国訪問団が新中国を訪れた。著者はこのときの副団長で、かつて広州嶺南大学（現在の中山大学）に学んだこともある。青春時代をすごした中国は、著者にとっては第二の故郷でもあつて、この中国が、どのようにして新しい中国に発展したかに関心をもって見聞している。特に希望して辺境のウルムチへ出かけたり、国慶節のパレードの力強さに深く心を打たれたり、嶺南大学時代の同級生に会い旧交を暖めたりしている。詩人の眼を通して見た今の中国は、著者にとっては、食物の種類が多く、寛容でユーモアを解する人のいる思い出の地と変らなかつたようである。

見てきた中国 浜谷 浩

東京 河出書房 1958 120 p. [2505]

著者は写真家で、1940年、1942年にも中国を訪れている。本書は、中国人民対外文化協会の招待を受けた日本文化人中国訪問団の一員として1956年9月から11月にかけて中国を訪れた時の写真を集めたもの。広州、上海、西安、杭州、蘭州、ウルムチ、北京の風物、生活などと国慶節の様子を写している。著者は人と人との理解を深めるのに役立てようとして、ポーズをしないふだん着の中国の風土と人々の表情を巧みにカメラにおさめている。

人民の国々を訪れる 藤岡三男

東京 1958 118 p. 図版 [4557]

本書は、1956年10月31日から12月23日にわたるソ連、西独、中国訪問記。一行は著者を含めて日本労働組合総評議会の代表者5名。旅行の目的は、ソ連社会主義革命40周年記念祝典に参加すること、西独の国情を見ること、中国総工会第八回全国大会に出席し、日中両国労働者の友好、親善をなすことにあつた。一行は11月28日に北京に入り、総工会の大会に出席したのち、京劇をみたり、近郊の農村合作社を視察した。次に東北地方の瀋陽、撫順、鞍山の機械工場、炭鉱、製鉄所を訪れ、労働者の労働条件、生活状況、教育、住宅、福祉施設などの視察を行っている。また上海では公私合営の状態をみ、杭州の西湖、武漢、広州を歴訪している。「中国労働組合同規約」と「第二次五カ年計画における労働者の任務」の2資料が附録されている。

文学者の見た現代の中国・写真集 木村伊兵衛・中島健蔵共編

東京 毎日新聞社 1960 30 p. 図版90 p. [3027]

1956年から1959年にかけて中国を訪問した文学者14人——青野季吉、井上靖、宇野浩二、江間章子、小田嶽夫、草野心平、多田裕計、十返肇、中島健蔵、中野重治、野上弥生子、堀田善衛、本多秋五、山本健吉——の写真集である。数ある作品の中から専門の写真家3人が選んだ写真を集めて1冊の本にしたもので、それぞれの写真には簡単な説明がつけてある。巻末に各氏の中国印象記を収める。

新中国の裏通り——社会部記者の見た中共 大隈秀夫

東京 鏡浦書房 1958 230 p. 図版 [3955]

著者は西日本新聞の社会部に勤務する人。1957年の初



めに中国を訪れた。訪問の資格や同行者などは本書に記されていないので不明。題名に「裏通り」とあるように、著者はできるだけ人民大衆の生活の中に入り、その結果とらえた社会主義建設途上に現われた矛盾、人民大衆の不満など、いわば新中国の暗い面を紹介している。売春婦や乞食の存在、数多い反革命分子、労働模範表彰という制度の行きすぎ、収穫の4分の1を税金として納めねばならぬ農民の生活、不備な小学校教育、人口増加の悩み等々である。くわしい旅程は明らかでないが、あとがきに2カ月間、1万5千キロにわたる旅とあり、香港、広州、武漢、上海、北京、西安から東北地区の瀋陽、ハルビン、長春まで足をのびしている。

中共の素顔 松野谷夫・野上正共著

東京 野田経済社 1961 311 p. 図版 [4869]

著者はともに朝日新聞の記者で、松野は1957年3月末から半年ほど北京特派員として中国各地を視察し、野上は1958年3月社会党使節団とともに新中国を訪れている。本書の冒頭で、著者はそれぞれの見聞に基づいて、経済建設への猛烈な意欲に燃え、機械力の不足を人力で補い、婦人の職場進出が著しい反面、農業と工業の発展テンポのズレを持ち、生活必需品や食糧の不足に悩まされているありのままの中国を描いている。続いて、中国経済の発展、人民公社、指導者の横顔を見聞だけでなく文献資料を駆使してつぶさに考察して、これが本書の中心となつている。追補の「六一年の中国」には農業不振を伝えられる最近の中国、及び国連代表権問題が論ぜられている。

中国考古学の旅——訪中考古学視察団報告 原田淑人編

東京 毎日新聞社 1957 198 p. 図版 [4866]

1957年、中国科学院の招待をうけ、日本考古学協会及び毎日新聞社共同主催の下に訪中視察団が組織された。団員は原田淑人、杉村勇造、駒井和愛、水野清一、杉原荘介、関野雄、樋口隆康、岡崎敬、安保久武、杉本要吉の10名で、4月16日から5月4日にわたり、北京、包頭、敦煌、酒泉、蘭州、西安、成都、洛陽、鄭州、安陽、済南、曲阜、南京、蘇州、上海、杭州、広州、長沙、武漢と広く各地をまわり、これらの地の考古学に関する研究所、博物館、発掘遺跡などを視察した。本書は参加者が分担執筆した旅行記で、巻頭には安保久武撮影の写真30頁がある。

私の中国旅行 野上弥生子

東京 岩波書店 1959 207 p. [3138]

著者は中国対外文化協会、中国作家協会の招待で、1957年6月2日から1カ月余にわたり、広州、北京、大同、延安を旅行した。本書はこのときの紀行文で、古い中国の文化遺跡と新しい中国の民衆生活——例えば広州の水上部落や北京の工場、風呂屋、刑務所、雲崗の摩崖仏、延安の大礼堂、毛沢東の洞窟の部屋、公弁庁など——がよく描かれている。毛沢東、朱徳ら中共首脳者の逸事や性格にも触れられているが、全体的には政治、外交を前面に持ち出さぬ文学的紀行である。

新中国の農業見聞記 山田登・山本秀夫・南郷茂重共著

東京 農林水産業生産性向上会議 1958 167 p.

[3126]

1957年6月末中華全国自然科学専門学会連合会の招きにより、2カ月間中国平原地帯の農業事情を視察した見聞記である。視察団は総勢50人で、国会議員、大学教授、農林省技術関係官、県農業試験場長、新聞論説委員、製造会社技術者等各方面の専門家を網羅している。一行は北京、南京、上海、天津、杭州、瀋陽、長春、ハルビン、広州をまわり、各地の合作社、国営農場、研究所などを広範に視察している。本書は土地改革、農業の集団化はどのように行われているか、農作物増産のためにどのような措置がとられているかという問題を軸として書かれた見聞記で、沢山の写真、図表を親切な解説をそえてのせている。

新生中国を打診する 井上善十郎

札幌 労働文化協会 1958 217 p. 地図 [4546]

北海道の平和団体から選ばれた14名からなる平和と文化の北海道訪中使節団は、中国保衛世界和平委員会の招待を受けて1957年9月26日から11月15日まで中国を訪れた。著者はこの使節団の一員、北海道大学名誉教授、医学博士で、昭和13~16年に同仁会中支支部に勤務したことがある。本書はこの旅行の見聞録で、全体を公式訪問、産業、学校教育、医療衛生、社会文化施設、都市、名所旧蹟、演芸などの章に分けて、それぞれ訪問、視察した場所と係員から聞いた説明を詳細に記述している。一行は北京、南京、上海、天津、大同、東北地方、西安、蘭州と足を伸しており、本書全体に人文地理的な記述が多い。著者自身は解放前の中国と比較してその変化、現在の建設に驚き、未来に希望のある明るい新中国の社会に感嘆している。

(学術)

33-6.7)

天津進歩

西日報

58-4) ⑤

4, 1933)

哲季刊

1, 1929.

的武装干

民間芸集

2, 1934)

1936)

参考資料



新中国の横顔 村瀬玄妙

京都 潮音舎 1957 308 p. [4593]

黄檗49代山田玉田の印可証明を禀けている著者は、日本仏教徒代表訪中仏教親善使節団の一員として1957年の9月から10月にかけて約40日間、仏教関係の史跡などを中心に、中国各地を旅行した。本書はこの旅行記である。訪問した各地における仏教の現状を、ユーモアのあるエピソードをおりまぜながら、豊かな感受性と好意的な批判とで、ある時は叙事的に、ある時は抒情風に記し、共産主義政権の成長と仏教の発展とは決して矛盾しないと結論づけている。著者撮影の写真が豊富におさめられている。

新中国のあしおと 近藤康男

東京 中央公論社 1959 312 p. [2751]

著者は1957年の10月から11月にかけて、東京大学山崎不二夫教授、東京農工大学近藤頼己教授、京都大学赤井重恭教授及び鹿児島大学小林嵩教授と共に、北京、天津、南京、杭州、広州等を訪れ、これら諸都市近郊の農業合作社を視察した。本書はこの時の記録であつて、合作化の過程、合作社の組織、合作化による生産力の向上等が著者の見聞を通してよくうかがわれる。なお著者が訪中の時はまだ人民公社は出来ていなかったが、本書執筆の頃は既に人民公社が出現しているの、それと合作社との関連も述べられている。

中国の旅 中野重治

東京 筑摩書房 1960 254 p. 図版 [3146]

1957年10月末より約1ヵ月間、中国作家協会と中国人民対外文化協会の招待をうけて第2回中国訪問日本文学代表团が訪中した。メンバーは山本健吉、井上靖、十返肇、堀田善衛、多田裕計、本多秋五と著者の7人。中島健蔵が北京で途中参加し、11月10日に発せられた共同声明にも加わった。本書は、著者が帰国後3年間に「新日本文学」、「アカハタ」、「近代文学」等に掲載した文を集録したもので、日程の順を追って書かれた旅行記ではない。北京、上海、杭州、重慶、成都をまわり、北京大学では日本文学についての講演をしたが、それらの印象や思い出をエピソード風に書いていて面白く読める。いくぶん理屈っぽいところもあるが、新中国の風物を背景にした人間（同行者をも含めて）と日本人の中国に対する対し方、心情とでもいつたものを感じるままに述べており、この点が本書の核になつている。

点描・新しい中国 中島健蔵

東京 六興出版社 1958 166 p. 図版 [2506]

著者夫妻は日中相互の友好と理解を増す目的で中国に招聘され、1957年11月6日から19日にかけて北京、天津、広州を訪れた。本書はその随筆風の旅行記で、著者自らの撮った写真が豊富におさめられている。

新中国紀行——若い中国のモラル 林 靈法

名古屋 東海学園出版部 1957 243 p. 図版 [4290]

1956年秋、和平委員会主席郭沫若氏の招請により、愛知県訪中親善使節団が結成された。著者はその一員である。一行は貿易、産業、労働、医療、教育文化、宗教、婦人、青年等各界代表から成る19名で、1957年11月27日から12月28日まで広州、武漢、北京、西安、南京、上海、杭州を訪れた。本書はこの旅行記で、全体的にみて、教育文化・宗教方面の見聞が多く記されている。日記と断想の2章からなる。日記の章では、各地視察の様、郭沫若、李德全、南漢宸等との会見のことが記されている。断想の章では、中国人民が如何に民族独立を全うしたか、中国革命と宗教の立場はどうか、中国の教育と日本の教育との比較などを述べている。また、著者は本書を通して中国人の社会主義に対するモラルの徹底に目をみはつている。

セールスエンジニアのみた中国 福山秀夫

東京 新読書社 1959 260 p. [3615]

著者は、1958年広州と武漢とで開かれた日本商品展覧会へ派遣された事務局、商社、メーカーの代表120名の1人（オルガノ商会代表）で、中国滞在期間は1958年2月16日から5月26日である。本書はその見聞録で、両展覧会のこと、展覧会のあい間に見た広州、武漢の製糖、製紙、製鉄等の工場、発電所のこと、展覧会終了後視察した北京、長春、瀋陽、鞍山、天津、上海、杭州のことが記されている。

近代中国の書——附中国遊記 松井如流

東京 二玄社 1960 178 p. 図版 [4851]

著者は書家で、日展評議員である。1958年5月14日より約1ヵ月、日本書道代表团14名中の一員として中国を訪問している。一行は広州、武漢、北京、曲阜、西安、蘇州、上海、杭州を訪れ、中国の書家たちと交歓し、書道関係の資料すなわち故宮博物院収蔵の金石拓本類や真蹟類、西安の碑林、曲阜孔子廟の碑林、陝西省博物館の諸碑、民間人愛蔵の書画などを具さに見学している。本



書は近世中国の書家たちを論じた小篇を集めたものであるが、巻末の「中国遊記」はこの日本書道代表団の一員としての旅行を随筆風に記したもので、「中国詠草」はこのとき中国各地で詠んだ短歌を取めたものである。

中国の法と社会——訪中法律家代表団の報告 日本法律家訪中代表団・国際法律家連絡協会

東京 新読書社 1960 252p. [4850]

1959年8月10日から約1ヵ月間、日本国際法律家連絡協会の仁井田陞、福島正夫、青山道夫、風早八十二等の一行25名(大学教授7名、弁護士17名、通訳1名)は、中国政治法律学会の招待により北京、瀋陽、鞍山、武漢、上海、広州の各都市を訪問した。本書はその報告集。全体が3部に分かれる。第1部「中国の法と道徳」では今回の見聞に基づいて新しい中国の法と道徳、司法制度、裁判、監獄等が記され、第2部「変貌する社会」では、農業と人民公社、工業と労働問題、社会改造と人間改造の問題にしばつて見聞を記す。第3部「中国の印象」は1、2部に入れられない印象記。このほか、法律事情や商業に関する座談会の記録、中国政治法律学会副会長呉徳峯、日本法律家訪中代表団長長野国助の挨拶が載せられている。

訪中1万5千キロ——変貌する新中国の奥地を行く
田川誠一

東京 青林書院 1960 232p. 地図 [4907]

松村謙三を団長とする訪中団が周恩来総理の招きを受けて、1959年10月19日～12月2日まで中国を訪問した。本書は、松村謙三の秘書として随行した著者の日記。同行者は竹山祐太郎、井出一太郎、古井喜美ら自民党代議士、新聞記者7名を含む16名である。広州、北京、蘭州、西安、三門峽、洛陽、昆明、成都、重慶、武漢、上海、杭州と広く各地をまわつて、工場、人民公社、学校、建設中のダム、遺跡などを見学している。これらの見聞が克明に記録されており、同行記者による座談会や中国の各機関の役員名簿、簡体字一覧表も附されている。

建国10年中国は躍進する 国慶節祝賀訪中日本代表団
東京 日中国交回復国民会議 1960 190p. 図版 [4868]

1959年の建国10周年国慶節に招かれて、日中友好協会など70余の民間団体から推薦された30名が日本代表団として式典に参加した。団長は片山哲。約1ヵ月滞在し、式典参列後、西北・西南コース(西安—成都—重慶—武漢)と東北コース(ハルビン—長春—瀋陽—鞍山—撫

順)の2班に分れて視察旅行をしている。本書は、式典、人民公社、婦人問題、科学、技術、教育、文字改革、司法問題などの各分野について団員25名が分担執筆した見聞録16篇を取める。その他一行が滞在中調印した共同声明などの文書、及び周恩来の論文「偉大な十年」、代表団の出席した経済問題、農業問題に関する座談会における中国側の報告2篇の全文翻訳が載せられている。一行の旅程はあとに附された行動日誌にくわしくうかがえる。

前進座中国紀行 河原崎長十郎等著

東京 演劇出版社 1960 497p. 図版 [4840]

1960年2月から4月にかけて、河原崎長十郎を団長とする前進座は、「佐倉宗五郎」、「勘進帳」、「俊寛」、「鳴神」の出しものをもって訪中した。本書は、総勢70人が北京、西安、武漢、南京、上海、広州の各地を公演した時の記録と中国演劇人である欧陽予倩、欧陽山尊、梅蘭芳らの前進座に対する劇評をまとめたものである。詳しい公演日誌があり、またグラビアが豊富に収められている。なお、一行は劇院、学校、工場、人民公社、博物館なども見学しており、それらの記録も含まれている。

杜甫草堂記 土岐善麿

東京 春秋社 1962 341, 21, 11p. 図版 [3484]

中国文字改革視察日本学術代表団の団長として1960年4月中国を訪問した著者は、北京での公式日程を終えると杜甫草堂のある成都に1日遊んだ。帰国後、杜甫草堂の沿革に関する資料の整理をはじめ、詩聖杜甫の生誕1250周年にあたる1962年に出版したのがこの書である。本書は著者のいうように、本格的な杜甫研究でもなく、新しい観察の旅行記でもない。永年同好の士と「杜甫を読む会」を続けている著者が、成都を訪れたのを機会に杜甫の詩を通して杜甫の生涯を偲び、はるか唐代に思いを馳せながら書いたものである。著者は武漢、上海、杭州、広州などにも立寄つたらしいが、それらに関する記述はない。巻末には、成都杜甫草堂編印の「成都杜甫草堂収蔵杜詩書目」が収録されている。なお同行者は倉石武四郎、原富男、さねとうけいしゅう、宮沢俊義、有光次郎、高杉一郎、村尾力、松下秀男、村岡久平である。

過去と未来の国々——中国と東欧 開高 健

東京 岩波書店 1961 211p. 図版 [3139]

中国人民対外文化協会と中国作家協会の招待をうけて野間宏、竹内実、松岡洋子、大江健三郎、亀井勝一郎と共に中国訪問日本文学代表団の一員として訪中した1960

年5月30日～7月6日の日記。日程の大半を北京で過し、ほかに上海と蘇州も訪れている。人民公社や工場の視察に関する記述は少く、名所旧蹟、風景、街の様子が文学者の豊かな表現でよく描かれている。なお日本では新安保条約反対の運動が最高潮に達した時期なので、旅行中どこに行つても誰と会つても『反対美帝国主義』が話題の中心となつた。そのため文学関係の人達との接触が多かつたにも拘らず、文学を論ずる時間的余裕がなく、本書も著者自身の文学論を述べるだけに終つている。他面この時期にしか見ることのできない中国の表情として、「人民日報」に報道された日本関係の記事やそれに対する人々の反応、毛沢東と陳毅の談話ももせている。本書の後半は同年9月から11月に東欧諸国を訪れた時の記録である。

写真・中国の顔——文学者の見た新しい国 野間 宏 等著

東京 社会思想研究会出版部 1960 180 p.

[3145]

中国訪問日本文学代表団の写真集。代表団は野間宏、亀井勝一郎、松岡洋子、竹内実、開高健、大江健三郎よりなり、1960年の6月を中心に5週間にわたつて広州、北京、上海、蘇州を訪問している。内容は、各氏がそれぞれ主題をもつて撮影、編集した写真と文よりなり、各各特徴ある説明文が写真をわかりやすく、楽しいものにしてしている。新しいものと古いもの、広大な風土、若い人や子供など物と人間が活々ととらえられ、まさに中国の顔といふことができる。

中国の旅 亀井勝一郎

東京 講談社 1962 232 p.

[3416]

著者は、1960年5月から7月にかけて日本文学代表団の一員として、さらに翌61年6月29日から7月15日まで井上靖、平野謙、有吉佐和子と共に中国を訪れた。本書はこの2回にわたる旅行の記録である。最初の旅行では著者は中国の風物を熱心に見て、その情景を著者の得た印象や感想とともに詳しく書いている。北京の故宮博物館、万里の長城、明の十三陵、蘇州の虎丘、寒山寺、留園、魯迅の墓など。このほか人民公社の見学、毛沢東との会見の記事もある。また、日本では安保反対斗争の高潮時だつたので、これに対する中国側の反応と著者の見解が述べられている。再度の訪問の時には、ほとんど北京に滞在して中国の文学者との交歓につとめており、その様子が記されている。

古い国新しい芸術——訪中日本新劇団の記録 尾崎宏次・木下順二共編

東京 筑摩書房 1961 276 p.

[3142]

1960年9月から11月にかけて中国を訪れた日本新劇団の記録である。村山知義を団長とし、文学座、俳優座、劇団民芸、ぶどうの会、東京芸術座の5劇団合同で総員71名が参加した。約2カ月間、北京、武漢、上海、広州とまわり、各地で公演し、観劇し、中国演劇人と会談するほか、社会施設や工場、農村も見学している。本書はこの旅行記であるが、農村、工場の見学記まで含まれているわけではない。中国演劇界の実情や、日本の演劇人が中国の演劇を見たり、中国の演劇人と語つて得た印象や感想の記録が中心になっている。そのほか旅行日記、中国側の日本劇団公演に対する批評なども収められている。

現代中国の教育——日本民間教育代表団訪中報告

日本民間教育研究団体連絡会

東京 教師の友社 1964 207 p.

[4905]

日本民間教育家代表団(三島一、大田耕土、今井誉次郎、田中実、遠山啓、高橋碩一、五十嵐顕、川合章、富田博之、山住正己)は、中国教育工会全国委員会の招待により1961年9月20日から10月22日にかけて広州、武漢、北京、南京、上海、杭州を歴訪し、史蹟見物、人民公社や工場見学、各学校視察を行つた。本書は各代表が自己の専門と照して記した報告書で、『政治に服務する』教育の実態を多くの角度から論じている。すなわち、農業と不可分な教育、『生産労働と教育の結合』をスローガンとした社会主義の教育原則、教員の養成と生活状況、授業内容などが報告されている。このほか幼児教育、労働者の文化施設、郭沫若、陳毅の談話なども載せられている。

経営者のみた中国——中国訪問日本経済界友好代表団の記録 日本中国友好協会

東京 1962 48 p.

[4849]

日中友好協会が全国の産業経済界から日中友好運動に関係する人々、12名を選んで中国に派遣した。団長は栄医療器株式会社社長指川謙三。1962年6月16日から7月14日まで滞在。本書はその間の見聞を団員が分担して書いたもの。全体的な概況、経済建設、教育、農村人民公社、中小企業、社会福祉と保障の現状についての報告6篇と、特に代表団が希望した中国民族資本家との懇談会の記録が収められている。代表団の性格から工業関係の報告がくわしく、見学した10カ所の工場の紹介、上記の民族資本家との懇談など、この分野の状況を知るのによい。

新中国学習の旅 宮川 実

東京 青木書店 1963 194 p. [4080]

1962年8月末、著者は労働者学習活動者訪中団の一員として、中国の学習運動が労働運動、農民運動、革命運動の中でどんな役割を果たしたか、中国の労働者や農民はどのような仕方で行っているかを見るために中国を訪問した。各地の労働者、農民と懇談したり、諸運動のすぐれた指導者の体験談を聞くことにより、中国では学習が生活の一部になっていることを知る。広州の毛沢東農民運動講習所、北京の革命博物館、さらに西安、延安をも訪れて革命の歴史をふり返っている。また国立科学院経済研究所での討論や、北京の紡績工場や国营住宅、長辛店の車輛工場、唐山の炭鉱、上海の工作機械工場と人民公社を見学して、解放後の労働者の生活を記している。全篇を通して一行が、中国革命の輝かしい歴史と、現在の中国のたくましい建設の様子を丹念に学習して来たことがうかがえる。結論として、中国では学習運動が労働運動、農民運動、革命運動の大きな基礎的部分をなしており、学習運動がなければ中国革命の勝利は不可能であつたろうと言っている。そして中国で学習してきた多くのことを日本の今後役に立たせたいと述べている。

世界紀行文学全集——中国編Ⅱ 志賀直哉等監修

東京 修道社 1960 340 p. 図版 地図 [2760]

前半には1949年以前の中国紀行が、後半には新中国紀行が収められている。主に文学者の筆になる紀行文の抜粋で、新中国の印象、とくに戦前のそれとの比較、北京、成都、重慶、延安、敦煌、杭州、広州のことなど新中国の輪郭を多くの人の印象で綴つたものである。米川正夫「目覚めた獅子」(1953年)、柳田謙十郎「北京」(1954年)、安倍能成「新中国見聞記」(1954年)、里見淳「隣邦の今昔」(1956年)、宇野浩二「忘れ難き新中国」(1956年)、福田豊四郎「敦煌覚え書」(1956年)、本多秋五「重慶の印象」(1957年)、井上靖「万里の長城と北京の天壇」(1957年)など。()内の西暦は、著者訪問の時期である。

モスクワ・北京文学の旅 岩上順一

東京 河出書房 1956 226 p. 図版 [4983]

著者は徳永直と共に1954年12月に開かれたソ連の第2回作家大会に出席し、その帰途、翌55年2月対外文化協会の招待で中国を訪れた。本書はこの時の記録である

が、いわゆる旅行記でなく、両国における文学界の事情だけを述べたものである。すなわち、著者らはもつぱら文学者と交流し、作家の生活、創作態度、文学者の組織とその活動などについて記している。中国では周揚、老舍、趙樹理、揚朔、白朗、秦兆陽らとそれぞれ会つた時のこと及び北京の文学講習所について述べている。

赤い国の旅人 火野葦平

東京 朝日新聞社 1955 312 p. 図版 [4984]

1955年4月ニュー・デリーで開催されたアジア諸国会議に出席した日本代表団50名のうち、28名が中国を訪問した。一行は政治家、経済人、学者、労働運動家、婦人団体代表、医師、作家、詩人、宗教家と多彩な顔振れで構成されている。4月21日中国入りし、広州、武漢、北京、瀋陽、撫順とまわつた後、10名が北朝鮮を訪問し、帰途南京、上海を経由している。本書は、この団の一員であつた著者の記録である。前に兵隊として、また報道班員として中国各地を歴訪した著者は、『自分の精神の問題としての旅行記、また一個の文学作品となるような魂の記録にしたい』と記している。内容はインド、北朝鮮、中国の部よりなり、大部分が中国で占められている。中山記念堂、農民講習所、大学、水上生活者、揚子江、工場、北京市内、天安門のメーデー、万寿山、北京監獄、天橋の商店、中央民族学院、撫順日本人戦犯管理所などを見学した様子が、著者の感慨と共にかなり詳しく書かれている。著者はたえず過去の中国と現在のそれを比較している。また滞在中の亀田東伍、中村翫右衛門に会つたことも各処にみられる。

新中国の労働事情——訪問記からみる労働組合法
横山利秋

国鉄労働組合 1956 106 p. 図版 [5029]

著者は国鉄書記長(現在衆議院議員)で、1954年10月日本労働代表34名と共に訪中した。本書はその視察記だが、主として中国労働運動とその背景を述べたものである。労働組合法の条文に従い、組合の定義、労働者の権利、労働保険、賃金、生活状況、文化教育、衛生施設、専従役員のことなど、中国の労働事情が諸データを加えて詳細に書かれている。一行は、北京、上海、瀋陽の各種工場、学校、合作社、病院、文化施設など見学し、各処で懇談会も行つていようだが、具体的な記述はない。(16頁につづく)

センター・ニュース

【奨学金の支給】

大学院学生もしくはこれに準ずるもので、近代中国の研究をしようとするものに、下記要領にて、(A)、(B)二種の奨学金を支給します。

応募資格：(A) 大学院修士課程の在學生、もしくは大学学部を卒業したがまだ定職につかず研究をつづけているもの。

(B) 大学院博士課程の在學生、もしくは大学院修士課程あるいは博士課程を終えたがまだ定職につかず研究をつづけているもの。

募集人員：(A) 3名

(B) 2名

支給金額：(A) 年額12万円(1名につき)

(B) 年額24万円(1名につき)

応募手続：下記書類を整えてセンターに提出する。

書式は任意。

- 1) 履歴書
- 2) 在学証明書または卒業証明書
- 3) 成績証明書
- 4) これまで研究したことの要旨(1,000字程度)
- 5) 1年間の研究計画(1,000字程度)
- 6) 研究論文
(学士、修士、博士論文でも、演習のレポート類でも、その他の論文でもいい、1篇を提出すること、提出できる論文のないときには、(4)の要旨を1,000字以上の詳細なものにすること、提出された論文は5月中に本人に返却する。)
- 7) 研究上の指導者
(応募者のことを尋ねる便宜のためであるから、名目上の指導教官でなく、これまで実際に指導を受けた人をあげてほしい。2名以上を書いてもらえばいい。)

募集期限：1964年4月30日

銓衡方法：委員会にて銓衡し、その結果は5月中に本人に通知する。

銓衡のため面接を行うことがあるかも知れない。

義務：奨学金を受けたものは、1年の終了後、研究経過をセンターに報告しなければならない。報告書は任意の用紙を用い、字数は1,000字程度とする。この報告書を提出する以外に、何等の義務もセンターに対して負わない。

【研究旅費の補助】

近代中国研究のため、1ヶ月以内の資料蒐集旅行をしようとする研究者に、下記要領にて、旅費の援助をいたします。

ここに研究者というのは、既に研究論文を書いたことのあるものか、大学院の学生を指します。

資金総額：30万円(年間)

支給金額：往復旅費(2等汽車賃、遠隔地のばあいは急行料金を含む)

滞在費(1泊2,000円、但し8泊以上は1泊1,500円)

申請手続：センター所定の申請用紙に下記事項を記入して申請する。

- 1) 官職氏名
- 2) 著書論文目録(大学院学生の場合は教官の推薦状)
- 3) 研究題目
- 4) 旅行目的(赴こうとする研究機関図書館、見ようとする図書、等)
- 5) 旅行期間
- 6) 乗車区間

審査方法：可否の審査は月例の常任委員会にて行い、その結果は、申請後1ヶ月以内に本人に通知する。

総額30万円に達したときは打切る。

義務：研究旅費の補助を得たものは、旅行終了後2週間以内に、センター所定の報告用紙に、赴

センター・ニュース

いた研究機関図書館、見た図書等を記入し、センターに提出する。

5・30事件と在華紡 中村 隆英
武漢政府の崩壊過程 栗山 喜博
中国文雑誌論説記事目録 (商務官報)

【研究論文の募集】

1964年9月発行予定の論文集「近代中国研究」第7輯の原稿を、下記要領にて募集します。

内容：近代中国に関する実証的研究
分量：原則として400字詰原稿用紙150枚以内
要約：応募原稿には、1,000字程度の要約を必ず添付する。
期限：1964年4月30日
審査：委員会にて審査し、その採否は5月中に本人に通知する。不採用の論文は返却する。

近代中国研究センター彙報 1 48頁 B5
センターの開設にあたって 市古 宙三
コロンビア大学の中国研究者養成 衛藤 藩吉
新収図書目録 (邦文・中文・欧文)

近代中国研究センター彙報 2 32頁 B5
咸豊四年広東天地会の叛乱 佐々木正哉
陳独秀執筆活動年譜 木村 靖子
センター・ニュース
新収図書目録 (マイクロ・フィルム)

近代中国研究センター彙報 3 32頁 B5
江西ソヴェト関係資料目録
新刊案内
「咸豊四年広東天地会の叛乱」補 佐々木正哉
センター・ニュース

【出版物目録】

東洋文庫近代中国研究室欧文目録 67頁 B5
東洋文庫近代中国研究室に別置されている欧文図書の著者名目録。1962年3月末日現在、1420部の蔵書が収録されている。

東洋文庫近代中国研究室邦文図書目録 204頁 B5
東洋文庫近代中国研究室に別置されている邦文図書の目録。1962年12月末日現在、3810部の蔵書が、著者および書名別に配列されている。

近代中国研究 第5輯 341頁 A5
20世紀初頭における蘇州近傍の一租棧とその小作制度 村松 祐次
咸豊二年郵県の抗糧暴動 佐々木正哉
中国文雑誌論説記事目録 (時務報)

近代中国研究 第6輯 359頁 A5 (5月刊行予定)
清末民初の江南における包攬関係の実態とその決算報告 村松 祐次
第一次国共合作期における内蒙古民族運動 坂本 是忠

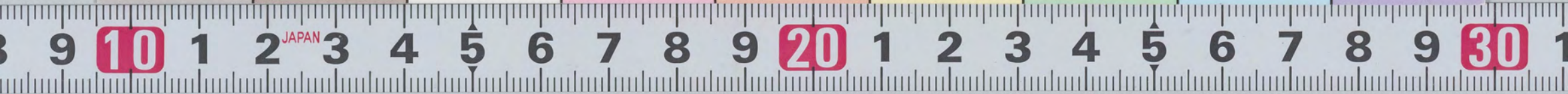
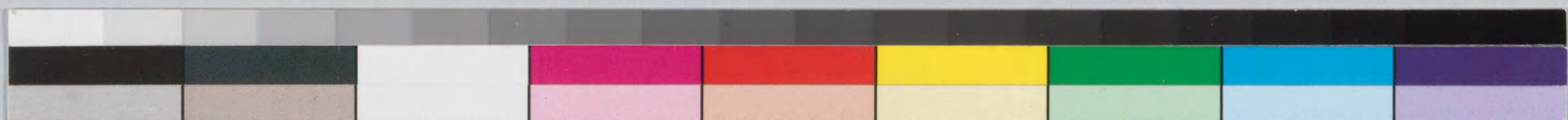
【雑誌論文抜刷寄贈のお願い】

みなさんが雑誌、紀要等に発表された論文の抜刷がありましたら、ご寄贈下さいませんか。

このごろは、雑誌、紀要等の発表機関が多くなったため、どんな論文が出ているか、ということが、なかなかわかりにくく、またわかっても、その雑誌、紀要がなかなか簡単にみられぬばあいが、少くありません。

センターでは、できるだけ近代中国関係の研究論文には注意し、彙報に新着雑誌論文目録を載せるようにしていきたいと思っておりますが、同時に、センターにできればそれらが見られるようにしたいと考えています。

したがって、みなさんが論文を発表されたばあいには、その抜刷か、もしくは原載の雑誌、紀要をセンターに寄贈していただきたく、寄贈されたものは、彙報の新収図書目録に掲載して広く一般の人にその存在を知らせるほか、永く保存して閲覧者の便に供したいと思っております。



新刊紹介

太平天国史料叢編簡輯 太平天国歴史博物館編

北京 中華書局 1961~63 6冊

太平天国起義百年を記念して太平天国に関する資料を大々的に集めようとする議がおこって、南京市に太平天国起義百年紀念史料編纂委員会がつくられ、1951年8月から工作を開始した。1956年10月南京に太平天国紀念館が設立されると、前記の委員会に代って紀念館内に編纂組ができて資料の蒐集整理の工作を行い、1961年1月太平天国紀念館が太平天国歴史博物館に改組されると、博物館がこの工作を引きついだ。かくして発掘せられた資料は1,200万字に及んだ。これらの多くは、当時の人の書いた太平天国に関する記録である。これらの資料のうち普通に他書にも見られるような内容のものを除き選ばれたものが800万字、これを編集して「太平天国史料叢編」とする予定である。しかしその出版は容易でない。そこでさらに精選して140万字の資料を編集出版することにした。それが「太平天国史料叢編簡輯」6冊である。全体は6部分に分かれる。第一部分(第1冊)は專著で、「粵寇起事記実」等9種をおさめる。第二部分(第2冊)は記事(上)で、「粵逆紀略」等11種、「論粵西賊情兵事始末」等9篇を、第三部分(第2, 3, 4冊)は記事(下)で「従軍日記」等13種、「癸丑会試紀行」1篇をおさめる。第四部分(第5冊)は時聞で「粵西雜録」等3種、第五部分(第6冊)は文書で「僧格林沁奏稿」等5種、「致周二南書」等7篇、第六部分(第6冊)は詩歌で「山中草」等5種、「兵民謡」等14篇を含む。

太平天国革命在広西調査資料彙編 広西僮族自治区通志館編

南寧 広西僮族自治区人民出版社 1962 318p.

広西僮族自治区通志館が広西師範学院歴史系の協力を得て集めた、広西における太平天国に関する資料集。この通志館ができたのは1959年であるが、設立されると間もなく、広西における太平天国に関する資料蒐集のことを計画、1960年3月から9月まで、広西の桂平、貴県、平南、藤県、武宣、象州、蒙山、昭平、玉林、博白、陸川、臨桂、桂林、全州、および広東の高州、信宜、化州など17県の53の人民公社を調査し、600余人の耆老を訪れ、口碑資料40万字、写真300余枚、関係ある碑文、族譜、詩文の手稿あるいは抄本多数を集めた。これらの資料を整理し、さらに1961年7月から8月にかけて補充調査を行って、編集刊行したのが本書である。全体の構成は次の通りである。

- 1) 革命前夜の広西社会
- 2) 広西拜上帝会組織的興起、發展及対地主階級的斗

争

- 3) 太平天国革命的群衆基礎
 - 4) 金田起義前後の武装斗争
 - 5) 在永安州の斗争
 - 6) 突圍北上
 - 7) 太平軍の組織、制度和紀律
 - 8) 太平天国与少数民族
 - 9) 太平軍北上后統治階級对革命人民的迫害
 - 10) 碑記及其他
- (1)から(9)までは口碑資料を問題により分類編集したもので、口述者の姓名は明記されている。(10)はこの調査によって得た碑文、族譜、詩文の類を集める。卷末に「太平天国革命在広西史事記要」「調査訪問人名表」とが附録される。前者は1828年から1852年7月に至る、広西における太平天国関係の年表である。

近代中国史事日誌 郭廷以編著

台北 正中書局 1963 2冊 (1450p. 附録 24p. 95p.)

1829年から1911年に至る近代中国の史事日誌、即ち月日までかけた非常に詳細な清末の年表。編者の前著である「太平天国史事日誌」とほぼ同じ体裁をとっている。但し太平天国時代の日誌は、本書では簡単にされている。卷頭には1498年から1828年にいたる中西早期関係年表(24頁)がつけられ、卷末には附録(95頁)として、軍機大臣、主要督撫、總理衙門大臣、出使各国大臣、各国使節の表がある。

世界各国漢学研究論文集 陶振誉等著

台北 中国文化研究所 1962 306p.

世界各国における中国研究の歴史と現状を書いた論文12篇を収める。執筆者は陶振誉(日本)、李元植(朝鮮) 郎増厚(ヴェトナム)、羅香林(香港)、周祥光(インド)、宋晞(アメリカ)、陳堯聖(イギリス)、費海璣(フランス)、蕭師毅(ドイツ)、吳宗文(イタリア)、張十之(スウェーデン)、呂秋文(オランダ)。

廖仲愷集 中国科学院広州哲学社会科学研究所編

北京 中華書局 1963 272p. 写真 4p.

廖仲愷(1877~1925)の全集。1917年7月から1925年8月に至る間の廖仲愷の書いた論説、書翰、電報、講演、訓話など65篇を、発表の年代順に集める。原典に拠るのを原則とするが、原典が得られず転載書による場合も、原典とともに本書のよった転載書を明記している。難解な語句や固有名詞には註がつけられていて便利である。廖仲愷の全集には、汪兆銘の書いた廖仲愷先生伝略を附した「廖仲愷集」が彼の死後間もない1926年の春に出ている。これに収められているのは25篇、それらはすべて



本書に含まれている。但し汪兆銘の伝はない。

黎元洪評伝 沈雲竜著

台北 中央研究院近代史研究所 1963 213 p.
(中央研究院近代史研究所専刊)

黎元洪(1866~1928)の評伝。典拠は示されていない。巻末に42種の参考書名があげられているが、特に珍しいものはない。

志摩日記 陸小曼編

香港 滙通書店 1961 236 p.

現代中国の詩人、徐志摩(1895~1931)の3種の日記を、夫人の陸小曼が編集したもの。3種の日記とは、西湖記(1918年9月7日~10月28日、杭州—上海—杭州)、愛眉小札(1925年8月9日~31日、北京:1925年9月5日~17日、上海)、眉軒瑣語(1926年8月~1927年4月、杭州—上海—杭州)。巻頭に陸小曼の序をのせ、巻末に小曼日記(1925年3月11日~7月11日)を附録する。このほか徐志摩像、徐志摩・陸小曼夫妻像や、夫妻におくられた胡適、聞一多、タゴール等の書画の写真25葉がおさめられている。

瞿秋白伝 司馬璐著

香港 自聯出版社 1962 161 p.

陳独秀の後をうけて中国共産党第2代の総書記となった瞿秋白(1899~1935)の伝記。典拠は註記されている。巻末に瞿秋白の遺著「多余的話」が附録されている。これは彼が国民党によって銃殺される直前の1935年5月、汀州の獄中で書いた次の7篇の文章を集めたもの。「何必説?—代序」「歴史的誤会」「脆弱の二元人物」「我和馬克思主義」「盲動主義和立三路綫」「文人」「告別」。

蔣百里評伝 曹聚仁著

香港 三育図書文具公司 1963 171 p.

民国の軍人、蔣方震(字は百里、1880~1938)の評伝。評伝であつて伝記ではなくまた研究書でもないから、蔣が何時何処で何をしていたかという事がわかり易くかかっているわけではなく、また典拠も示されていない。巻末に蔣の遺著「日本人——一個外国人的研究」が附録されている。

郁達夫日記九種及其他 郁達夫・王映霞合著

香港宏業書局 1963 232 p.

郁達夫(1896~1945)の1926年11月3日から1927年7月31日に至るまでの9種の日記(勞生日記、病間日記、村居日記、窮冬日記、新生日記、間情日記、五月日記、客杭日記、厭炎日記)を集める。この時期は彼が上海に

おいて創造社の活動に献身した時期であるが、同時にまた王映霞に熱烈な愛情をささげた時期でもあり、これら9種の日記にそのさまがよくうかがわれる。しかし郁達夫と王映霞との結婚は10年でやぶれ、1937年には遂に離婚することとなるが、正式の離婚に先んじて、両人の言い分は陸丹林の主宰する「大風旬刊」に掲載された。1937年3月香港出版の「大風旬刊」第30期に載せられた「毀家詩紀」は郁達夫の弁明であるが、これを見た王映霞は、「大風旬刊」の編集責任者陸丹林への書信の形で4回にわたり彼女の立場を述べて郁達夫に反論した。この両人のやりとり、即ち郁達夫の「毀家詩紀」、王映霞の「答弁書簡」はともに本書に附録されている。

本書のほか金紫閣著「郁達夫的愛情日記」(香港、藍天書屋、1963年、151頁)があるが、これは村居日記、窮冬日記、新生日記、閑情日記、客杭日記、厭炎日記と毀家詩紀を含むだけ。また収録された日記も、一部分だけで、はじめの村居日記の書き出しは「十四日、星期五」とあるだけで何年何月のことかわからない。

白石老人自伝 齊璜口述 張次溪筆録

北京 人民美術出版社 1962 103 p.

現代中国の画家として著名な齊璜(号は白石、1863~1957)の自叙伝。1933年以来、白石老人が口述し、それを張次溪が筆録したもの。彼の祖先の話からはじまつて1948年86才で終っている。巻頭に齊白石九十五歳の時の写真一葉がおさめられている。

齊白石画法与欣賞 胡佩衡・胡彙著

北京 人民美術出版社 1963 134 p.

齊白石の絵画を論じたもの。款識、題賛、詩、書法、篆刻についても簡単にふれている。巻末に148幅の絵画の図版がある。

毛主席的好戰士——雷鋒 中国青年出版社編輯部編

北京 中国青年出版社 1963 150 p.

1962年8月に殉職した中国人民解放軍の戰士、雷鋒(1939~1962)の伝記。雷鋒が殉職すると、「雷鋒同志に学べ」という運動は全国にひろがった。その雷鋒学習のテキストとして中国青年出版社が陳広生に委嘱して編修したのが本書。伝記のほかに、雷鋒の1959年から1962年8月10日に至る日記が摘録されている。

雷鋒的故事 陳広生等著

北京 解放軍文芸社 1963 97 p.

雷鋒の事蹟を書いたもの。筆者は陳広生、崔家駿、潘照坤、王徳昌の4人。内容は前掲書とほぼ同じ。但し雷鋒の日記はない。序文、出版の年月が前書と同じなのでどちらが先にできたのかわからない。

論雷鋒 中国青年出版社編

北京 中国青年出版社 1963 52 p.

「中国青年」に載った雷鋒に関する次の三つの論説を収める。

- 1) 学習雷鋒 (羅瑞卿)
- 2) 把青年的無産階級覚悟提到新的高度 (胡耀邦)
- 3) 論雷鋒 (中国青年報社論)

中国革命史講義 胡華主編

北京 中国人民大学出版社 1962 569 p.

中国人民大学歴史系中共党史教研室が1953年以来、教科用図書として胡華を主任として編集したもの。初版は1959年。本書はその第一次修訂本。内容は五四運動より中華人民共和国の成立に至る革命史の概説。その構成は次の通りである。

- 1) 中国共産党的建立時期
(1919年5月～1923年12月)
- 2) 第一次国内革命戦争時期
(1924年1月～1927年7月)
- 3) 第二次国内革命戦争時期
(1927年8月～1937年7月)
- 4) 抗日戦争時期
(1937年7月～1945年9月)
- 5) 第三次国内革命戦争時期
(1945年9月～1949年10月)

初版本との相違はほとんどないが、気のついた修訂は

- (1) 中共黨員に「同志」の語が加えられていること、
- (2) 一大大会の記事に「党の綱領と決議が通過した」という事実が加えられていること (53頁)、
- (3) 1929年にはじまる経済恐慌の際の列国の工業生産に関する記述が省略されていること (初版本347, 348頁)、
- (4) 百団大戦に関する叙述が省かれていること (初版本407, 408頁)、
- (5) ヤルタ協定および中ソ同盟条約締結に関する記事が略されていること (初版本467, 468頁) 等々。

近代東北人民革命運動史 中国科学院吉林省分院歴史

研究所・吉林師範大学歴史系編

長春 吉林人民出版社 1960 316 p.

旧民主主義革命時期 (1840～1919) 満洲における反帝国主義、反封建統治運動の概説書。その構成は次の通りである。

- I 農民反抗封建統治反抗帝国主義侵略的闘争在東北逐漸高漲 (1840～1905)
 - 1 外国資本主義侵入和農民反抗封建統治的闘争 (1840～1866)
 - 2 農民手工工人反侵略反封建闘争日赴高漲 (1866～1894)
 - 3 甲午中日戦争和東北人民的英勇反抗

(1894～1895)

- 4 反抗帝国主義瓜分狂潮的闘争和義和団運動在東北 (1895～1905)

II 資産階級領導的革命運動在東北的開展及其失敗 (1905～1919)

- 5 抗捐搶糧運動蓬勃開展和資産階級革命派的活動 (1905～1911)
- 6 辛亥革命在東北的開展及其失敗 (1911～1912)
- 7 帝国主義扶植北洋軍閥對東北的黑暗統治和東北人民的反帝反軍閥斗争 (1912～1919)

11枚の地図と5枚の絵図とがあり、巻末には1840年から1919年にいたる「近代東北人民革命運動史大事記」が附録されている。使われている資料には余り珍しいものはない。

上海近百年革命史話 章回・包村等編写

上海 上海人民出版社 1963 231 p.

1842年上海軍民の抗英闘争から、1949年5月上海の解放にいたるまで、約100年の上海における革命の歴史を概説したもの。史話であって研究ではないから、典拠はあげていない。その代り図版が豊富である。

十年来的新中国文学 中国科学院文学研究所「十年来的新中国文学」編写組編

北京 作家出版社 1963 186 p.

中国科学院文学研究所は建国10周年を記念して、「十年来的新中国文学」の編集出版を企てた。本書はその試印本。緒言、小説、詩歌、話劇と新歌劇、散文、児童文学の6章からなり、巻末には34頁に及ぶ1949年7月から1959年9月にいたる文学年表「十年来的新中国文学紀事」を附録する。

啓新洋灰公司史料 南開大学経済研究所・南開大学経済系編

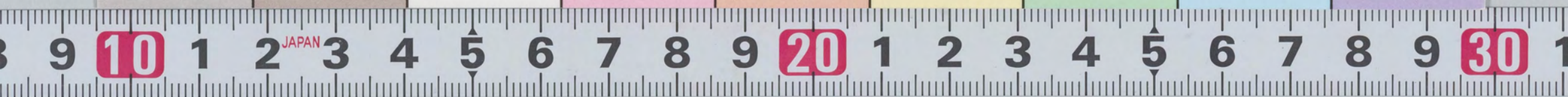
北京 三聯書店 1963 456 p.

啓新洋灰公司というのは、北京からそう遠くない唐山のセメント会社のことで、1889年、唐山細綿土廠として成立、1906年、啓新洋灰公司と改名されたものである。本書はこの会社の1958年にいたるまでの史料集で、1) 成立の経過、2) 啓新公司と帝国主義、封建勢力、官僚資本の関係、3) 工場の位置と製造技術施設、4) 製造と販売、5) 管理組織機構、6) 独占と競争、7) 資本の蓄積、8) 職工の生活と労働運動、9) 解放後啓新公司の社会主義改造の9章にわかれる。この構成でも明かなように、時代的には1949年をきかいとして前後に分かれるだけで、史料は、時代順にならべられるのではなく、上記のテーマに従って分類編修されている。出典は明記されている。





1
17
28
30



近代中国研究センター彙報 No.4
1964年4月1日発行

編集発行 近代中国研究センター
東京都文京区駒込上富士前町147東洋文庫

